

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）^{アザリング}

—世界の再分割と人種論の顕現—

李 孝 徳

1. はじめに

人種（race）の分類^{タクソミー}やそれに随伴したとされる科学的人種差別は、一般的に啓蒙思想に始まったと見なされている（Mosse [1978] 2020: 3-4; Miles and Brown 2003: 39-40）。もちろん人種主義^{レイシズム}であれば異人嫌悪^{ゼノフォビア}や異教徒憎悪^{ペイガン・ヘイトレッド}などの様々な差別や排外主義が想起され、無数の「起源」が議論されているが、世界の人々を人^{ホモ・サピエンス}類という同一生物種の解剖学的外貌すなわち表現型^{フェノタイプ}によって連続的かつ体系的な種別化が行われたのは、博物学の発展に代表される理性と合理性によって世界の体系化が試みられた啓蒙思想においてからというわけである。

しかしながら啓蒙思想に人種主義の起源を求める議論は、現在において批判対象となっている人種主義の祖^{プロトタイプ}型を見出すものとなっており¹⁾、米国の比較史家ジョージ・M・フレデリクソンが指摘するように、奴隷制に起源を持つカラーラインを生み出した白人優越主義（植民地主義的反黒人主義）とナチスドイツによって進められてショアーに結果した反セム主義という人種主義の二大潮流を歴史化する作業は異なる軌跡をたどり、それぞれの研究では他方の研究にあまり関心が払われずにきたことがあって（Fredrikson 2002: 16）、啓蒙思想における「人種」についての研究でも同様の分離が起きていることがある。

さらに人種（race）という用語が明示的に使われるようになったのは啓蒙期であるとはいえ、人種主義（racism）という概念が使われるようになったのは20世紀に入ってからであることからすれば（李 2019: 93）、今日において人種主義として批判的に捉えられている事象の類似度や関連性に依拠して種々の啓蒙思想にその萌芽を見出すことは遡及主義あるいは代表制ヒューリスティックを犯しているという誹りを免れるのは難しく思える。もちろんある事象に対する新しい分節化によって、以前には考えられていなかった先行する事例やその他の地域の出来事を分節し直し、新たな分析的アプローチが可能になるのはよくあることで、そこに大きな意義を見出せることはあるだろう。しかし現在から啓蒙期における人種言説に人種主義の起源を遡及する議論では、啓蒙期の人種言説がそもそもなぜ顕現したのかを十分に理解することはできず、そのためフランスの思想家エティエンヌ・バリバルの言う人種

複合体（Balibar et Wallerstein 1988: 28-9）——人種的差別に関わる思想、イデオロギー、実践などが結合した総体的な社会現象——がどのような歴史的、社会的、文化的条件で啓蒙思想に立ち現れ、ヨーロッパの思想と文化に浸透拡大し、近代社会一般において人間関係を認知する際に発動される実効的な判断基準として組み込まれるまでに至ったのかという人種主義の特異な史的展開を十分に把握することはできないと思われるのである。

そこで本稿では、啓蒙期に展開された人種言説に系譜学的な分析²⁾を試みる。この系譜学的分析を通じて、啓蒙期の人種言説を支えていた間テクスト性³⁾を示すことができると考えるからである。以下論じることからわかるように、啓蒙期のヨーロッパでは人種をめぐる種々の言説は他の言説と相互参照しあい、ときに批判・対抗することで自らの意義を獲得していた。本稿で明らかにしたいのは、啓蒙期における人種をめぐるこうした間テクスト的構成のありようを支える政治性にこそ、近代社会がそのメンバーシップに持ち込んだ排他性としての人種主義の起源が求められるということである。

近年、言語や地域に限定されてきた啓蒙思想における人種論・人種概念研究を批判的に越えて、トランスナショナルかつポストコロニアルな観点から歴史的に整理し、同時代における関係を考察し直すことが試みられている⁴⁾。とはいえ、そうしたアプローチは整理が始められたばかりで、テキストの読解と分析に関してはいまだ膨大な未踏の領域が残されていると言ってよい。本稿ではそうしたアプローチに沿いつつ、よりトランスナショナルかつ超領域的な観点から啓蒙期人種論の種々のテキストに分け入り、精査を試みる⁵⁾。

2. 「人種」の顕現

人種という言葉は啓蒙期に広く使われはじめた。もちろん人間を系統的に範疇化する考え方自体は古くから存在していたが、race（人種）という概念によって人間集団を弁別しはじめたのは啓蒙期のヨーロッパにはかならなかった（李 2018: 91）。とはいえ race それ自体の言葉の出現については諸説あり、その起源は明確ではない。人類学者寺田和夫は、アラビア語由来のこの言葉が14世紀のイタリア語（ロンバルディ語）文献に使われているのを確認できるというドイツの人類学者エーゴン・アイクシュテットの議論を紹介している（寺田 1967: 72）。米国の西洋思想史家イヴァン・ハナフォードは、race という言葉が13世紀から16世紀にかけて西欧諸語に現れてはいるが、現在使われている意味とは異なっており、現在と地続きの意味になってきたのは16世紀後半で、今日と同じ意味になったのはフランス革命とアメリカ革命（アメリカ独立）以後のことだと述べている（Hanaford 1996: 4-6）。米国の米国史家オードリー・スメリーは語源的には諸説あるが、15世紀にイタリア語の *razza* が英語とフランス語に入ってきたものの、英語において race が人間の諸集団を指すようになったのは17世紀以降のことであり、分類概念として使われるようになったのは18

世紀後半のことだと述べている (Smedley and Smedly 2012: 35-9)。また、英国の社会学者マイケル・バントンは race という言葉は 1435 年にスペイン語文献に現れたのち、16 世紀初頭のフランス語と英語でも現れるようになり、15 世紀から 17 世紀にかけて人間の系統を指す言葉として使われ、18 世紀の博物学において種々の生物が分類されるようになると人間も分類されるようになって race が使われ始め、19 世紀に入ると生物学的な種概念と同様の人間集団の分類概念になったと述べている (Banton 2016: 1717-8)。ただし、こうした用語の起源はつまるところ資料の入手範囲に関わる遡及可能性、論者の race という言葉と概念の解釈枠組みによるため、その実証性を比較検討して来歴や起源を確定する作業は困難であり、本稿にとって大きな意味があるわけでもない。ここでは race という言葉が多少の時代のずれはあるものの、ヨーロッパで広く使われるようになったのが大航海時代以降であり、人種論が立ち上がったのは博物学の進展する啓蒙時代であるという点でほぼ意見の一致をみていることを確認しておけばいいだろう (Smedly 2005: 15)。

実際、1694 年刊行のアカデミー・フランセーズ辞典の初版では、race は家系や獣類に関わる lignée (血統), lignage (血筋), extraction (生まれ) と説明されていたのが、1835 年の第 6 版では「同じ国の出身で、顔立ちや外貌が互いに似ている多数の人たち」といった今日的な意味に近づいており (Hudson 1996: 247)、18 世紀に語意に変化が起きたことがわかる。つまり大航海時代以降、ヨーロッパ人の非ヨーロッパにおける異民族との遭遇と接触が増大し続けるなか、膨大な新しい知識や情報を整理して受容する必要性と唯物論的な物の見方が発展することで、それまでの世界認識の参照軸であった宗教や神話・伝承に依拠する異形な「他者」の民族誌から離脱して、実際の観察から比較可能となる基準を見出し、それまでの知見にはない多様な人間集団を弁別しようとする経験帰納的な認識枠組みに人種 (race) が採用されるようになったのが啓蒙期だったのである。

3. 征服期の「他者」認識

とはいえ、啓蒙期以前に、従来の知見では理解できない非ヨーロッパの人々との遭遇はすでにスペイン人によって始まっていた。当初こそ“発見”された土地は古典古代から中世に至るヨーロッパの伝統的な世界地理認識の一部であるアジア大陸 (インド、中国、日本、ジャワなど) の東端に位置づけられてインディアスとされ、そこに住む人々はインディオと呼ばれたが、アメリゴ・ヴェスプッチによる航海とその航海の情報が記された地理書『宇宙誌入門』(“発見”された大陸にアメリカという名前が初めて使われた) が広く知られることで、インディアスはそれまでのヨーロッパの地理には存在しない「新大陸」として認知し直され (O’Gorman 1961=1999: 89-182)、古典古代の知識にも聖書の記述にも該当しない人々 (インディオ) の存在はその起源をめぐって大きな議論を巻き起こした (Hanke 1959=1974)。

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

征服国であるスペインでは、この後論じるインディアス論争において、インディオの見た目や体軀が文明論的な観点から論じられることはあったが³⁶⁾、身体的特徴と精神的傾向は対応するという古典古代以来の心身観が踏襲された議論であって、決して今日の人種主義でイメージされる表現型や形質、文化本質主義に関するものではない。逆に言えば征服期から啓蒙期にかけて人種論、人種分類が要請されるような変化が「他者」認識に生じたと考えることができる。啓蒙期に生じたと想定されるこうした変化を理解するために、以下、征服期におけるインディオをめぐる議論について見ておくことにしたい。

先ほども述べたように、征服期のスペインではインディオの法的地位とその人間性をめぐって国政に関わるレベルで激しい議論が戦わされた。インディアス問題あるいはインディアス論争と呼ばれるものである。一般的に、このインディアス問題はバリャドリッド論争に焦点化されることが多い。バリャドリッド論争とは、スペイン国王カルロス1世の命のもと、1550年から51年にかけてバリャドリッドにおいて行われた神学者ファン・ヒネス・デ・セプルベダとドミニコ会司教バルトロメ・デ・ラス・カサスとのあいだで繰り広げられた公開討論で、セプルベダは古典古代の知識（アリストテレスの自然奴隸人説⁷⁾など）と聖書の記述、スコラ哲学、教会の権威に基づいてコンキスタドールの征服行為と野蛮なインディオの隷属化を正当化する一方、ラス・カサスはインディオを諸法によって規律された完全なる人間とみなし、セプルベダ同様古典古代の知識や聖書、スコラ哲学を典拠としつつインディオの自発的同意に基づくキリスト教への帰依と対等な人間としての扱いが統治の根拠になることを訴えて征服における残虐な行為の数々を批判し、インディオの救済を訴えたのだった。とはいえこの論争の始まりは、ドミニコ会修道士のアントニオ・デ・モンテシノスがコンキスタドールによるインディオへの非道な扱いに心を痛め、スペイン本国のフェルナンド王に謁見してインディオの惨状を訴えたことだった。モンテシノスの提言によって公式にインディオの隷属化が問題視されるに及び、非キリスト教世界の異教徒支配に関わるスペインの国家理性をめぐって当代の理論家たちの間で繰り広げられた思想闘争がインディアス論争にほかならなかった。

政治思想史家の松森奈津子はこのインディアス論争（インディアス問題）が、スペイン史の射程にとどまらないヨーロッパの近代政治秩序の形成に関わる問題であったことを詳細に論じている（松森2009）。近代の国家主権は、ヨーロッパにおける地域国家の権力伸長によって宗教（キリスト教）権力が衰退して確立したとされてきたが、征服期のスペインでは支配下に置いたラテンアメリカの（ユダヤ教徒やムスリムと異なる、これまでキリスト教世界が出会ったことのない）異教徒に対する裁治権の根拠が問われることになり、そこからキリスト教世界以外の土地と異教徒においても妥当する普遍的な法の存立性が問われて万民法（国際法）を更新する思考が生まれたのだという。皇帝や教皇の権威、被支配者の劣等性（隷属が当然とされる自然奴隸）、（無主とされる）土地の発見、被支配者自身による被支配

の選択（実際には武力による服従化）、神の贈与（神がスペインにインディアスとインディオを与えたとされる考え）といった伝統的な異民族支配の権原は否定されて、宗教的権威から自律した万民法の行使主体として国家を主権者とする思想が、スコラ哲学者にして神学者・法学者であったフランシスコ・デ・ビトリアとその教えを受けたサラマンカ学派⁸⁾によって展開されたというのである。

ヨーロッパにおける国家主権の確立過程に植民地支配が関わっているという松森の指摘は人種主義の成立を考えるにあたってきわめて重要だと思えるのだが、とりあえずここで問題にしたいのは、非ヨーロッパの植民地に拡張された裁治権が適用される際のインディオの資格がどのように考えられていたのかという点である。インディアス論争はスペインのインディアス征服の正当性及び植民地に対するスペインの国家理性の内実をめぐる論争であると同時に、ヨーロッパがインディオという未知であった他者をどう概念的に包摂するのかという試みでもあったからである。ここではセプルベダとビトリアの門下生であったラス・カサスの間で行われたパリヤドリード論争を中心に、インディオがどのように認知されたのかを検討したい。

『ソクラテスの弁明』よろしく「祖国にはびこる疫病ともいうべきルター派」の対話者を設定して（つまりセプルベダの議論は新教に対する思想闘争でもあった）、征服戦争の正当性をセプルベダが語る時（Sepúlveda 1550=2015）、その立論は一貫している。神の教え（キリスト教）は遍く世界に広げられなければならぬ以上、インディオはキリスト教に入信しなければならない。食人、偶像崇拜、人身御供といった弊習を持ち、自然法⁹⁾に外れて生きるインディオは「野蛮人」であり、そうである以上アリストテレスの言う自然奴隷であって、キリスト教に帰依させるためには隷属化が当然であり、入信を阻害するインディオの行動や意識、文化、習俗を排除するための武力行使は正しい。何よりスペインの支配下で臣民／キリスト教徒になることはインディオに文明をもたらして人間らしい人間となる道を開き、救済をもたらす。コンキスタドールのインディオに対する非道な残虐行為は認められるものではないが、戦争それ自体が正当な理由と宣戦布告（レケルミエント）¹⁰⁾によって始められたのであれば、征服戦争とインディオの隷属化それ自体は神の意志にしたがう正当なものである。古典古代の知識、聖書、スコラ哲学、何より十字軍遠征における征服の権利の理論的支柱であったトマス・アクィナスに依拠しつつ、セプルベダはこう主張するのである。

スペイン人入植者（エンコメンデロ¹¹⁾）に肩入れすることになるセプルベダの征服戦争擁護論は、直接的な植民地経営を図ろうとする王権には余計なことであり、またそのあまりの好戦性もあって疎んじられ、主流になることはなかった（セプルベダの征服戦争擁護論は当時においては刊行が許可されなかった）。一方で、こうしたセプルベダ流の正戦論を批判するビトリアにしる、ラス・カサスにしる、弱者であるインディオに正義や人権を認めている点で伝統的な神学・法学的な見解を越えていくにしても（松森 2009: 327）、あくまでも

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

インディオは教化の対象であって、スペイン人と同等の権利を持つとされるのもキリスト教への帰依が前提にされており、スペインによるインディアス支配の正当性は疑われることがなかった。実際、ラス・カサスはスペイン政府にインディオに対する損害賠償と原状回復を要求したものの（松森 2009: 322）、一方でスペインによる植民地経営を維持するためにインディオに代わってアフリカ人奴隷を移入して使役させることを訴えもした（ラス・カサスはアフリカ人奴隷を所有していた）。後年、アフリカ人奴隷もインディオ同様迫害されてきたことを知って深い悔恨を示し、以前の主張を撤回しつつ奴隷制廃止を訴えたが¹²⁾、ラス・カサスのインディオやアフリカ人奴隷擁護は決して今日の「文化相対主義」の立場に立つものではなく（松森 2009: 151）、極論すれば植民地に対する帝国主義的包摂を暴力的にではなく人道的に行うことの要請でしかなかった。

ヨーロッパ文学者・思想史家の片岡大右は、征服戦争時のインディオに対する残虐行為が可能になったのはインディオが人間とみなされていないことによるというフランスの人類学者レヴィ＝ストロースさえが持っていたよく流布した見解に対して、「征服期のスペインで、発見された土地の住人が人間とは違う種に属しており、従ってアダムの子孫ではないなどという議論をする人間はいなかった」（片岡 2012: 195）ことを多少の例外を示しつつも強調している。実際、1512年には、アントニオ・デ・モンテシノスの訴えを受けてスペインのカスティーリャ王国ブルゴスでは、インディオは自由人（奴隷ではない人間）であり、臣下の未信徒（異教徒ではない）として布教の対象であって、奴隷化することもその土地を奪うこともできないとする先住民保護の「先住民の処遇に関するオルデナンサス（通称ブルゴス法）」が制定されており、実際の適用度に疑問はあったにせよ、インディオはまぎれもなく法的に人間として認められている。しかし征服時のインディオは人間とみなされていないという認識（誤認）は広く認められ、たとえば米国の哲学者で近代的人種主義の理論的な解明を試みた先駆けの一人であるリチャード・ポプキンも近代的人種主義の成立を論じる過程でそうした認識を示している（Popkin [1974] 1980: 81）。

しかしながら片岡の言うように、セプルベダの正戦論『第二のデモクラテス』（Sepúlveda 1550=2015）を見てもインディオを人間ではないと断定する個所はない。インディオを野蛮人と呼び、「獣のようだ」と繰り返し述べて、その人間性の欠如をあからさまに侮蔑してはいるが、それはあくまでも人間としての劣位性を強調するために述べているのであって、決していわゆる人間ではない生物種と見なしているわけではない。実際セプルベダはトマス・アクィナスを引きつつ、インディオに対して「理性を欠く人々は野蛮人と呼ばれ、理性が欠如するのは気候、あるいは、弊習のためである。つまり、気候によって、大勢の人が墮落し、弊習によって、人間はほとんど獣と変わらなくなるのである」（Sepúlveda 1550=2015: 20-1）と説明している。だからこそラス・カサスのインディオ擁護論では、弊習と見なされるインディオの信仰、儀礼、祝祭、政治・社会制度がいかにスペイン人に勝る

とも劣らない賢慮（ただし決して文明とは言わない）によるものであるかが詳細に展開されるのである（Las Casas 1558=1995）。

ここで注目すべきは、当時のスペインでは文明的に遅れている未信徒の教化という目的によって（理想的には戦争は認められても非道な暴力は否定されて）インディオの征服が正当化されていたのに対し、現在ではインディオを人間以下の存在と見なすことで征服が正当化されたという見解が流布してしまっているという片岡の指摘である。片岡が言うように、表向きであるにせよ福音の下賜がインディオ支配の理由であるなら、インディオを人間ではないとする見方は公式的には決して生まれるはずがない。人間を対象とすることによって成立する福音の下賜という目的自体が意味を失ってしまうからである（片岡 2012: 196）。とはいえ、現在では「野蛮人」なり「未開人」なりに暴虐が振るえた／振るえるのは相手を人間と見なしていないことによるという理解はかなり一般的になっているように思われる。実は、以下の議論を先取りしておけば、人間の連続的な変異を遺伝的（生物学的）な離散的差異に変換し、非共役的な差異として再分節することで、一定の人間集団を先天的な人間以下の劣種と見なす視点の設定を可能にしたのがほかならぬ啓蒙期の人種論だったのである。

4. 人種分類の出現

啓蒙期の人種論、人種分類は、科学的人種主義の始まりとされることがあるが、その実決して純粹に帰納的なものでもなければ、厳密な体系性を持つものでもない。というより人種（race）が分類項目として明確に説明や定義は行われておらず（カントは定義を試みているのだが、この点後述）、その使用に一貫性はなく、そもそも明示的に使われていないこともある。一見体系的に見えても種々の曖昧さやいい加減さ、混乱が認められ、今日理解からするとひどく戸惑うものである。以下、啓蒙期の人種論を整理して特徴を論じるが、論点を先取りしておけば、人種は、ヨーロッパの優越性を担保に、伝統的・宗教的な世界認識を近代的な世界認識に架橋するツールとして創造され、利用された概念にほかならなかった。

人種（race）という言葉を用いた人種分類の嚆矢とされるのは『ムガル帝国誌』の著者として知られるフランスの哲学者・旅行家フランソワ・ベルニエの「種（espèce）あるいは人種（race）による地球の新たな分割」（Bernier 1684）である。当時の雑誌に掲載された小文で（刊行時は匿名）、タイトルからわかるようにその目的は「世界」を分割しなおすことだった。実はベルニエに限らず、啓蒙期の人種に関わる言説は基本的に世界をどう再分割するかという意識が背景にあった。中世のヨーロッパの世界地理認識ではT O図（図1）に見られるように、人の住める世界はヨーロッパ、アジア、アフリカの北半球の3つの温帯地域だった。大洪水後、ノアの子ヤベテ、ハム、セムが世界に広がって諸民族の祖となったという『創世記』の記述は、中世には当時の地政学に沿ってヨーロッパはヤベテ、アフ

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

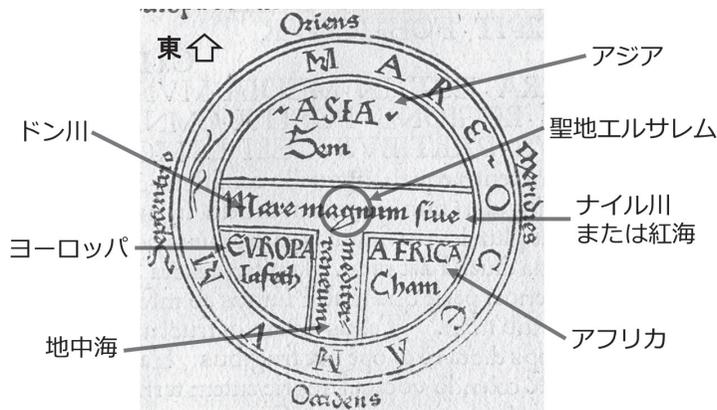


図1 TO図

中世ヨーロッパの世界地図で、図内の川や海がT字で、図の外周がO字で表されていることからTO図（またはOT図）と呼ばれる。中世におけるキリスト教的世界観が図式的に示されており、Oは世界をとりまく海オケアノス、Tはドン川、ナイル川、地中海を表し、陸地はTの字でアジア、ヨーロッパ、アフリカに3分割され、中心に聖地エルサレム、上（東）に天国がある。この円外には怪物が住むと信じられていた。図は（Brotton 2013: 177 Fig. 14）を一部改変。

リカはハム、アジアはセムに由来すると解釈された。ちなみにアフリカ人の肌の黒さがノアからハムの子孫にかけられた呪いの痕跡であるとされたのも中世のことである（Sweet 1997）。

しかしルネサンス期には古典古代の文献が再検討され、15世紀末の新大陸の「発見」、16世紀半ばのマゼラン船団による世界周航、17世紀後半のスペインの司祭ペドロ・クベロによる陸路での世界一周などの非ヨーロッパ地域の探検が新しい情報をもたらし、何より科学革命を経るに及んで、中世的な世界観・地理認識に依拠することは不可能になり、従来の知識では理解できない更新し続ける世界の新たな情報に対応する必要から新たな世界認識の枠組みが求められた。啓蒙期の人種分類もその一環で、大陸、地域の「新発見」を踏まえた従来の地理認識を更新する人間のいわば生物地理学として構想され、4～6種から構成された。

とはいえ各人種は身体的な特徴（主要には皮膚の色）だけでなく、その美醜や性格、精神的傾向などが当時の旅行記などに依拠した伝聞による情報に基づいて恣意的に（概ね否定的な文言で誇張されて）論じられており、生物学・生態学的な記述というよりは、自分たちとは異なる異形の人々の奇妙さを記した古典古代時代のプリニウス『博物誌』（Plinius 77=1986）のアプローチに近いと言ってよい。ただそれまでの民族誌と決定的に異なる点は、そうした他者とヨーロッパ人が同じ人間という生物として連続性をもって範疇化されて並置され、説明されていることである。大航海時代以降、世界は球体でその地表は連続し、ヨーロッパ、アジア、アフリカ以外にも大陸があり、ヨーロッパよりも古い歴史を持つ地域・国

があることがわかって¹³⁾、古典古代の知識・知見や聖書の記述では世界を説明できなくなってきただけではなく、キリスト教世界＝ヨーロッパが相対化されはじめた新時代にあって、日々更新されるヨーロッパの他者を自らとの連続性において対照しつつ、中世的な地政学の影響を多分に残したまま、ヨーロッパ（人）の再定義が試みられたのが啓蒙期の人種分類、人種論なのである。

たとえばベルニエであれば——タイトルからわかるように *espèce* と *race* とが区別されていないのだが——第1人種の地域は、ロシアの一部を除くヨーロッパ、北アフリカ、中東、南アジア、東南アジア西部、第2人種の地域は、北部を除くアフリカ、第3人種として東南アジア東部、東アジア、北東アジア、中央アジア、そして第4人種がラップ人〔現在ラップは蔑称とされサーミが使われるが、本稿では原文で使用されている場合にはそのまま使用する〕となっている。各地域の人々、特に女性の美しさが説明される（啓蒙期の人種論は基本的にこうした性的言説とセットになっている¹⁴⁾）。人種判別の基準には皮膚の色だけではなく、顔の造形や歯、髪質、肢体が用いられている。実際、第1人種には黒色、銅色などの有色の人々が含まれており、皮膚の色だけでは種 (*espèce*) を区別することできないとベルニエは言う。第3人種の人々は皮膚が白いとされて、われわれが今日抱く人種判別の基準として想起する「皮膚の色」の基準とは異なっていることがわかる。興味深いのは、人間は単一起源でその多様性は気候の違いによって生じたという伝統的な理解にベルニエは疑義を呈し、人種は各々生来的に異なる性質を持つという多起源論的な考えを披露していることである。

なお、ベルニエはラップ人を第4人種としているが、それはラップ人が当時発見された「未開人」だったことによる。啓蒙期ヨーロッパでは新たに出会った未知の人々や民族が新しい人種とされることがままたり、ラップ人はスウェーデンが緩やかに支配していた北方領域に17世紀後半から開拓を推進して入植を進めたさい（小内・野崎 2018: 37）、ヨーロッパ人とは異なる風貌や習俗・生活が今日的に言えば人類学的に注目を集めていた。1729年にはスウェーデンのウプサラ・サイエンス・ソサイエティで、ラップ人の起源が関心を集め、新世界の人々、イスラエルの失われた民、ピグミーあるいはスキタイ人などと議論された（Koerner 1999: 57）。

またベルニエは、アフリカの喜望峰にいる黒人 (*noirs*)¹⁵⁾ をその他の地域の黒人とは異なる種 (*espèce*) だとしているが、当時、ヨーロッパ人のアフリカ進出が拡大するなか、ニグロ〔蔑称だが、啓蒙期のテキストでは一般的に使われていたので、原文で使用されている場合には本稿ではそのまま用いる〕とは異なる人種が“発見”されて、カフィール (*Caffre*, *Cafre*, *Kafir*, *Kaffir* などと表記。注15参照) と呼ばれた〔現在では蔑称だが、原文で使用されている場合には本稿ではそのまま用いる〕。啓蒙期には、たとえば後述するフランスの博物学者ビュフォンが「カフィールやホッテントットについて言えるように、南緯18度や20度を超えると、ヒトはもはやニグロではなくなる」（Buffon [1749] 2009: 488）と述べて

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

いるように、アフリカ南部にニグロやホッテントット〔蔑称だが、原文で使用されている場合には本稿ではそのまま用いる〕とは異なる人種のカフィールが存在すると信じられた。もともとの語はアラビア語で非ムスリムのアフリカ人を指していたのが、15世紀にポルトガル人が東アフリカに住む人々をカフィールと誤称して以降、混乱に混乱を重ねて使われ、あたかもアフリカ南部に実在する集団＝人種のように使われてきたが、明確に定義できる集団があるわけではない（Arndt 2017）。

オランダの政治学者シープ・ストゥールマンはベルニエの文章を分析して、その人種分類が古典古代の神話や聖史（sacred history）から離脱して「^{ナチュラル・ヒストリー}自然史」の萌芽となっていると論じている（Stuurman 2000）。確かに経験に基づく観察からの考察になっており、いわゆる伝統的な自然神学の世界観からは抜け出しているが、対象を論じる際の体系性は恣意的で、決して厳密な分類学^{タクソミー}のそれではない。そしてそれはベルニエにとどまらず、それ以後の啓蒙時代の人種論においても本質的には変わらない。人間集団の外貌の特徴を一般化し、そこに性質・特性や知的能力を結びつけることで文明度にもとづく人種の序列化が行われており、その意味で啓蒙時代の人種論は、いわゆる純粋な比較形態学的な分類ではなく、大航海以来のヨーロッパ人の世界認識の拡張に相即して形成された自己優越性を確認するための「世界異聞集」を脱し切れておらず、独断的な他者論以上のものではない。一方で、征服期のような福音の拡張を前提にした宗教的な他者認識からは離脱している。ここで問題にしたいのは、伝統的・宗教的な他者認識からは離脱しながら、「独断」を持続させているものは何なのかということである。

5. 人間の連続性と差異

スウェーデンのリンネは、1735年に『自然の体系』（Linné 1735）¹⁶⁾を刊行し、博物学に新しい展開をもたらした。初版は11頁ほどの小規模な冊子程度のものであったが、伝統に沿って自然を鉱物界・植物界・動物界の三界に分けたのち、各界を綱、目、属、種に階層区分するという新しい分類を行い、人間を動物として組み込んだのである。雄しべと雌しべの数を基準に据えたシンプルな性体系に基づく植物分類は、当時のヨーロッパに方法論上のインパクトを与えたが（後に種々の齟齬が生じて廃れた）、より社会に大きな衝撃をもたらしたのは人間（Homo）をサル、ナマケモノとともにヒト形目（Anthropomorpha）の動物に範疇化したことだった。人間を特別な存在と見なす当時のキリスト教の世界観からすれば、人間をサルと同じ動物と見なすことはキリスト教に対する挑戦だったからである¹⁷⁾。

とはいえリンネはヒトの分類に当たって、『自然の体系』の初版ではヒト族の亜種（varietas）として白色ヨーロッパ人（Homo Europaeus albese）、赤色アメリカ人（Homo Americanus rubese）、褐色アジア人（Homo Asiaticus fuscus）、黒色アフリカ人（Homo Africanus niger）を挙げ、

nus nigr) を設けており、伝統的な三大陸に「新大陸」を加えた四大陸に亜種を振り分け、皮膚の色を付加したもので、従来の地政学的な分類を踏襲し、植物の分類に用いられてきた亜種を人間に流用しており、分類枠組み自体に新奇さはなく、race (人種) も用いられてはいない。ちなみにベルニエが人種として範疇化していたラップ人についてリンネは言及していないが、リンネは1732年、当時にあつてはヨーロッパにとって辺境で未開地であったラップランドをいわば植民地化事業¹⁸⁾の一環として科学アカデミーの支援を受けて調査旅行し¹⁹⁾、出会ったラップ人をヨーロッパにおける「崇高な未開人」と称揚していたので (Korner 1999: 56-81)、ヨーロッパ人に含めたと考えられる。

『自然の体系』第10版 (Linné 1758) になると、リンネはヒト (ホモ・サピエンス) の亜種に、当時注目を集めた人間社会で育てられぬまま成長した「野生児」の発見に影響を受けたホモ・フェルス (野生人)²⁰⁾ と、従来の伝聞や伝承に基づく化外の民であるホモ・モントロス (奇形人)²¹⁾ を加えている。さらにはヒト属の亜属としてやはり伝承的な化外の民的存在であるホモ・トログロデユッテス (穴居人)²²⁾ が挙げられてもいる。各亜種の特徴に胆汁質、多血質、粘液質といったヒポクラテス／ガレノス流の四体液説の用語が用いられていることからしても、リンネの分類は、人間から特別性を剝奪して動物に組み入れたとはいえず、あくまでも伝統的な世界観にもとづいていた²³⁾、中世以来のヨーロッパ思想を支配してきた「個別創造説」——旧約聖書「創世記」の第1章にある神は全生物を天地創造の第5日目と6日目に、現在それらが存在しているのと同じかたちにデザインし、個別に創造したという考え方——やそこから派生した種の不変性という考え方も疑われることはなかった。

6. 諸民族の階調化

その意味では、ビュフォンが『一般と個別の博物誌』(正式名は『王室博物館の解説による一般と個別の博物誌』、以下『博物誌』と略称) で試みた人種分類 (Buffon [1749] 2007, 2008, 2009) は、伝統的な世界観を抜け出したものだと言ってよい。ビュフォンは第2巻の「動物の一般誌」のなかに「人間の自然誌」を組み込んでリンネと同様に人間を動物の一種として扱いつつ²⁴⁾、続く第3巻の「人間の自然誌」における「人類の変異 (Variétés dans l'espèce humaine)」(Buffon [1749] 2009: 397-585) では、ベルニエやリンネのように大陸ごとに人種を振り分ける伝統的な属地的分類を行わず、民族単位で人種的な異同を論じているからである。とはいえそれは形質に基づく生物学的な分類というより諸民族 (nation と peuple が使われている) の特徴を記述する民族カタログともいべき内容になっており、明示的な人種分類は行われていない。というよりビュフォンはリンネ的な形態の構造的類似性に基づく分類を思弁的なものとして嫌い (Buffon [1749] 2007: 188-96)、「人間の自然誌」において「その主要な事実、異なる気候の中で人間の間で見られる多様性からしか導

き出すことができない」と主張する（Buffon [1749] 2008: 128）。そのためだろう、ビュフォンのアプローチはきわめて風土誌的である。北のラップ人を皮切りに、ユーラシア大陸を東に進んで、中国人、日本人を説明し、東南アジアに南下して太平洋諸島の諸民族について語ると、北上してモンゴル、インド、中近東の人々を論じ、ヨーロッパは南、中央、北に分けてそこに住む諸民族を説明する。その後、アフリカ大陸の諸民族を説明すると、アメリカ大陸の諸民族を北から下って南端まで説明し、マゼラン海峡からオーストラリアにおける人々の説明で終わるという内容で、身体的な特徴（皮膚の色、体格）や性格、美醜や好み、文明化の度合い（開化、半開、未開）などが述べられている（西川 1985: 6-11）。

ここで注目すべきは、ビュフォンが諸民族を上位の分類概念としての人種（race）に振り分けていることである。たとえば「日本人は中国人と十分に似ているので、同じ人種と見なすことができる」（Buffon [1794] 2009: 417）、「長らくエチオピア人の皮膚の色や顔の特徴について誤解があった。隣人のヌビア人と混同していたからである。しかし彼らは別の人種である」（Buffon [1749] 2009: 488）などと述べており、ベルニエやリンネではまず大陸が分割され、その大陸の居住者が変異／亜種あるいは人種とされてその要素として諸民族や個人々が説明されていたのが、ビュフォンではまず各地の民族が言及され、その上でそれらの民族が同じ人種かどうか述べている。使われている人種の定義は判然としないが、従来の地政学的なアプローチとは異なり、諸民族をより大きな人間集団として範疇化するための、新たな世界分割のマーカ―として人種（race）が使われていることがわかる。明確な説明がないので不分明ところがあるのだが、ビュフォンは「黒色人種を構成するさまざまな民族を調べてみると、白色人種と同様に多くの種類があり、白色人種に茶色から白色までのすべての色合いが見出せるように、黒色人種にも褐色から黒色までのすべての色合いがあることがわかるだろう」（Buffon [1749] 2009: 493）と述べており、白色人種と黒色人種を両極に置きつつ、諸民族を皮膚の色によって階調的に位置づけることを構想していたように思われる。そしてこの階調は寒冷地域と熱帯地域を両極に、ヨーロッパを中心とする温帯地域を頂点とした気候の厳しさに相応する諸民族の良質さと美の階梯の世界でもあった。

サモエド人、ラップ人、グリーンランド人は、非常に黒い。グリーンランド人のなかにはアフリカ人と同じくらい黒いものがあるとさえ言われている。寒さも暑さも肌を乾燥させて変質させ、ラップ人に見られるような黒ずんだ色にする。寒さは自然の産物すべてを縮めて小さくしてしまう。だから常に厳しい寒さにさらされているラップ人は人間のなかで最も小さい。

最も温暖な気候は（北緯）40度から50度で、最も美しく、最も良質な人間が見られるのもこの地帯である。この気候の人間の皮膚の色が真に自然だと考えられる。他のすべての皮膚の色や美しさは、これを基本型あるいは単位とする ^{ニュアンス} 違いで関連付けられるべきで

ある。両端では真の皮膚の色と美から同じだけ遠のく。文明化された国々はこの地帯に位置するが、それはジョージア、コーカサス、ウクライナ、ヨーロッパのトルコ、ハンガリー、南ドイツ、イタリア、スイス、フランス、スペインの北部で、これらの民族はすべて世界で最も美しく、最も良質でもある。(Buffon [1749] 2007: 571-2)

実際、諸民族の特徴を表す形容は、肌の色 (teint) では白>黄色>茶色>オリーブ>日焼け色>黒、身長では背が高い>ちょうど良い>低い、美醜ではとても美しい>かなり美しい>どちらでもない>醜い>非常に醜い、文明度では開化>半開化>未開となっており、序列的な表現が意識的に使われていることがわかる²⁵⁾。ベルニエやリンネのような地政学的な分割に随伴する人種分類とは違って、皮膚の色を緯度(気候)の度合いに対応させつつ世界の諸民族を連続的な「質」の階梯へと序列化する分類となっているのである。そしてビュフオンは人類の変異について以下のように結論づける。

人類は互いに本質的に異なる種から構成されているのではなく、逆に、もともとはただひとつの人間という種があり、それが地球全面に増殖して広がった後、気候の影響、食物の違い、生活様式の違い、流行病、さらには多少とも似た個体が無限に混在することによって、さまざまに変化してきたというのが事実である。これらの変化は、最初はそれほど顕著ではなく、個々の変異 (variété) を生み出すだけであったが、同じ原因が継続的に作用することによって、より一般的に、より顕著に、より不変になって、その後、変種 (variétés de l'espece) となったというのが事実である。それは、父親と母親の奇形や病気が子供に受け継がれるにつれて永続化し、世代から世代へと永続するということである。そして最後に、これらの変化はもともと外的かつ偶発的な原因が組み合わさることのみ生じたものであり、同じ原因が時間をかけて継続的に作用することのみ確認され、定着したということである。また、同じ原因が存在しなくなったり、別の状況や組み合わせが変化したりした場合、少しずつ、時間とともに消えていく、あるいは現在とは異なるものになる可能性が非常に高い。(Buffon [1749] 2009: 573)

基準を示すことなく諸民族に階調を見出すビュフオンの議論はいわゆる循環論法でしかないのだが、こうした人間の諧調を序列化できたのはビュフオンが退化 (dégénération) という概念を持ち込んだことによる。この退化についてもやはり明確な説明はないが、特筆すべきはビュフオンがこの退化を生物学的な観点から用いていることである。ラテン語起源のこの言葉はもともと「属人的・系統的なものから脱落する」という意味で、その後侮蔑的な意味合いを持つように転じ、17世紀のシェイクスピアやヘンリー・モアにもこの意味での使用が認められるのだが、そこには生物学的な意味合いはなかった (Gilman 1985: 169)。し

かしビュフォンは遺伝的系統に関わる文脈で race を人間だけではなく馬にも使い（Buffon [1749] 2008: 259）、形態的には同じと言っていい馬とロバが異種ではあるものの（雄のロバと雌のウマから）不妊の交雑種が生まれることでロバを馬の退化したものとしていること（Buffon [1766] 2020: 410-20）、アルビノを論じる個所で退化が劣化（dégradation）と同じ意味で使われていること（Buffon [1777] 2009: 429 note 71）などからすると、生物の形質に多様性が生じる事態を世代経過に伴う継次的な変容の結果と考え、その際に生じる生物学的な質的劣化（とビュフォンに映ったもの）を退化と見なしていたと思われる。

実はこうしたビュフォンの議論は伝統的な世界観に深く依拠するものでもあった。ひとつはあらゆる人間は同一の祖先から生じたという単一起源論（monogenism）である。これはアダムとイブを唯一の人間の祖先とし、それ以降の人間を墮落した存在とする聖書の教説と合致するもので、啓蒙期にあっても広く採られていた。また、自らが居住する地域（ビュフォンでは温帯地域）の文明的な優越性をその他の地域との風土的な差異から論じるのは、アリストテレスの議論を踏襲するものだった。アリストテレスは『政治学』で、ギリシア民族の「寒冷地に住む民族、とりわけヨーロッパに住む民族」と「アジアに住む民族」に対する優越性をヒポクラテスやプラトンを参照しつつ風土的な観点から論じており（Aristotelēs n.d.=2018: 375）、ビュフォンはアリストテレスの議論におけるギリシアを温帯地域に置き換えて論じている（『博物誌』が自らの住むパリ王立植物園園から始められているのもこうしたことが関わっている）。なお、モンテスキューはビュフォンの『博物誌』とほぼ同時期に刊行された『法の精神』「第14篇 風土の性質との関係における法について」（特に「第2章 いかんか、さまざまな風土によって人間は異なるか」）で、風土が生理学的に人間の性質に及ぼす影響について種々の民族を例に論じているが（Montesquieu 1748=2016: 164-73）、そこでは風土は人間の欠点を促進もすれば抑制もすると述べられており、ビュフォン流の環境決定論が同時代においてある意味で相対化されている点は興味深い。

さらにビュフォンは「存在の連鎖」を生物世界の認識枠組みとしていたことがある（Buffon [1749] 2008: 115）。「存在の連鎖」とは、米国の思想史家アーサー・O・ラブジョイが広大なヨーロッパ思想の分析を通じて剔抉した信条・観念体系で、すべての存在物は神によって個別に創造されており（「個別創造説」）、最も高等なもの（天使）から最も下等で原始的なもの（鉱物）にいたるまで、あらゆる事物は「連続の原理」によって徐々に最小の差異をつくりだしながら単線的かつ連続的な階層秩序を形成し、低次のもものは高次のもものために存在するという宇宙観のことである。事物は「^{コスモロジー}欠けている環」のひとつもない「存在の大いなる連鎖」を「^{ミッシング・リング}充満の原理」にもとづいて埋めつくしているとされる。プラトンにまで遡り、アリストテレスが明確に観念化したとされるこの宇宙観は、中世を通じて18世紀後半までヨーロッパのエピステモロジーに強い影響力を持ち、とりわけ18世紀の啓蒙思想においては広く受け入れられていた（Lovejoy [1939] 1960=2001: 183-207）。ではビュフォンに

おける人種 (race) はこうした諸民族の階調にどのように関わるのかと言えば、人類をいわば諸民族の連続したスペクトルにとらえ、そこに諸民族の系統的なまとまりを見出して人種 (race) と呼んでいるようである。つまり人種は人間が感覚的に弁別したものと理解されているために実体的な分類項目として採用されていないものと思われる。ただしここで忘れてはならないのは、ビュフォンが人間はすべて単一起源としながら、多様な差異を持つ諸民族を、ヨーロッパを中心とする温帯地域の白色人種を頂点とし、そこから北側と南側の両方へと拡大するとともに皮膚の色が白色から濃色へと変化し、美と良質さも劣化 (= 退化) する人種の階梯として位置づけたことである。

7. 多起源論における人種的差異

啓蒙期には、伝統的・神学的な人間観の延長上にある人類の単一起源論に与しない人種論も示された。人類には複数の起源があるとするもので、後に多起源論 (polygenism) と呼ばれるものである²⁶⁾。スコットランド啓蒙を代表する哲学者デイヴィッド・ヒュームは明示的な人種分類を行ってはいないが、多起源論と呼べる意見を先駆けて表明したフィロゾフの一人である。1748年に発表された「諸ネイションの性質について (Of National Characters)」²⁷⁾ という文章に、1753年に加筆された脚註で述べられたもので、そのあまりに悪しざまな人種主義的言明のゆえに啓蒙期における人種主義の顕現として批判にさらされてきた²⁸⁾。

私は、ニグロをはじめとする他のすべての人種 (4, 5種類ある) は、生来白人より劣っているのではないかと思いがちである。白人以外に文明化したネイションは存在しなかったし、行動や思索の面で卓越した個人も存在しなかった。白人以外の人種には独創的な製造物もなければ、芸術もないし、科学もない。一方、古代のゲルマン人や現在のタルタル人のような最も粗野で野蛮な白人でも、その勇敢さ、統治形態、その他においてもやはり何か特別なものを持っている。本来的にこれらの人種がそもそも区別されていなければ、こうした一定で一様な違いがこれほど多くの国 (countries) や時代で生じることはなかっただろう。わが国の植民地は言うに及ばず、ヨーロッパ全土にニグロの奴隷が散らばっているが、これらの奴隷のうち、独創的な兆候が見出された者は一人とてない。しかしわれわれのなかには教育がなくとも、どの職業においても頭角を現し、功を成す下層民がいる。なるほどジャマイカには教養があると言われるニグロがいる。しかし彼が賞賛されるのは、オウムが簡単な言葉を二言、三言話すとそうされるように、ほんのわずかなことを成し遂げるからのようだ。(Hume [1753] 1758: 125 note)²⁹⁾。

この注がつけられた本文の当該箇所は「実際、南北極圏の向こう側や、あるいは熱帯域に暮らすすべてのネイションは、その他の種（species）よりも劣っていて、人間精神のより高度な到達点に達することができないと考えうるいくつかの理由がある。こうした顕著な差異によっておそらく、物理的な要因に訴えることなしに、地球の北方の住民の貧窮や悲惨、物をほとんど必要としない南方のネイションの怠惰は説明されよう」というものであり、その後には「他のすべてのネイションを野蛮人と呼んだギリシア人とローマ人は、天分と優れた理解力をより南方の気候に限定し、北方の諸国民はすべての知識と礼儀に欠けるものと断言した。しかしわれわれの島国は、戦闘と学問のいずれにおいても、ギリシアやイタリアが誇らねばならないような偉人を生み出してきた」（Hume [1753] 1758: 125）とされている。直接的な言及はないが、先に見たアリストテレス『政治学』、古典古代のエラストテネスやストロンボリらの地誌学的議論を踏まえつつ、同時期のビュフォンの議論と同様に自国を文明の中心に置こうとする意識がうかがえる。ただしビュフォンが人類の単一起源を主張したのに対して、ヒュームは人類には複数の起源があるとする多起源論の立場に立っている。

ちなみにこのヒュームの議論は影響力を持ったようで、ジャマイカの農園経営者にして奴隷所有者であり、「所有の自由」という英国の権利に則って奴隷制を擁護したエドワード・ロングは、ジャマイカという植民地の歴史、政府、居住者、経済、地理を包括的に記述する最初の試みであった『ジャマイカ史』で、「ヒューム氏は、アフリカ原住民を観察して、彼らが他の種（species）よりも劣っており、高次の人間の精神に到達することはまったく不可能であると結論付けている」（Long 1774: 376）とヒュームを援用し、アフリカ人を劣等な人間とすることで奴隷化を合理化する典型的な議論を披露した。

明示的な多起源論に基づく人種分類の嚆矢は、フランス啓蒙を代表する一人である作家・思想家ヴォルテールの『歴史哲学』における「さまざまな人種」（Voltaire 1765）だとされる。ヴォルテールはそこで「白人、黒人、アルピノース人、ホッテントット人、ラップ人、アメリカ人が、まったく異なった人種（races）だということを疑えるのは、盲人だけである」と彼らしい皮肉な物言いで主張する。というのも「たとえ極寒の地方に移住させられても、つねに彼らと同じ種類の生き物を生み出す」（Voltaire 1765=1989: 8）、つまり環境を変えても形質的な特徴に変化のないことがその理由である。アリストテレス以来の人間の多様性の環境要因論と人間はアダムとイブ以降連続しているとする当時の聖書理解を経験的な事実にもとづいて否定しており、フィロゾフらしい合理的な議論を試みてはいる。

とはいえヴォルテールの議論はかなり恣意的で牽強附会である³⁰⁾。それぞれの身体的な特徴はほかのどれとも似ていないという説明だけで人種が分類され、その定義は言及されない。人種（race）についても系統的な意味で使われているのだと思われる一方、民族（nation）と同様な意味で使われてもいて、人種というカテゴリーをどのように考えているのか判然としない。アフリカ人のアルビノを自身が目にしたことアルピノース人といった人種

を想定するような誤解はもとより、歴史書や当時の旅行記、言い伝えや伝聞から恣意的に引っ張ってきた情報によって自らの議論を作り上げており、一方的な議論が多く、決して説得的な分類が展開されてはいない。ひとえにその議論では、当時のヨーロッパ人とは外見及び文化的特徴が著しく異なると思える民族を挙げ、それを共約不可能な異質性として人間の諸集団の差異に見立てて人種に区分することが目的となっている。ヴォルテールが理神論の立場から当時の腐敗した教会やキリスト教の弊習を批判していたことは周知のとおりだが、この人種論でも目指されているのはアダムとイブ以来の人間の連続性を説く聖書の歴史的な不整合と虚偽を批判してキリスト教の権威を貶めることであって、決して体系的な人種論、人種分類を構築することではない。

ここで注目すべきは、ヴォルテールがキリスト教批判のゆえに聖書成立の根元にあるユダヤ人史を否定するなかで「ユダヤ人は、われわれが黒人を見るのと同じように、劣等人種 (une espèce d'hommes inférieure) として見られていた」(Voltaire [1765] 1775: 83) と述べていることである³¹⁾。ヒュームも先述したエッセイで、黒人だけでなくユダヤ人に対しても「欺瞞でよく知られている」(Hume [1753] 1758: 123) と否定的に言及していたが、ヴォルテールにあってはユダヤ人と黒人とが劣等人種とされている。管見では啓蒙期の人種論でユダヤ人が劣等な「人種」として黒人とともに言及される例をヴォルテール以外に見ない。

啓蒙期の人種論における非白人への蔑視問題は後ほどあらためて論じるが、ここで確認したいのは、ヒュームであれヴォルテールであれ、提示されている多起源論は人類の系統が複数あると主張することが目的なのではなく、非ヨーロッパ人(特にアフリカ人)は自分たちヨーロッパ人よりも本来的に劣るゆえに異なった存在であるという専断からこうした多起源論が持ち出されていることである。つまり劣等視が人種間の生来的な差異を呼び寄せているのである。もうひとつ確認しておきたい点は、こうした多起源論がヴォルテールやヒュームという当時においてキリスト教に基づく伝統的な規範や認識を批判し、理性的・合理的な思考・姿勢の必要性を説くフィロゾフによって主張されていることである。経験と事実とを重視し、先験的な誤謬から解放されることを訴え、その信憑性に疑義を呈して聖書批判を行いながら、一方で当時ヨーロッパを覆っていた非ヨーロッパ(人)に対する偏見に満ちたテクストに疑問を持つことなく、あるいは自らの偏見を補強すべく依拠しているのである。

ヴォルテールはキリスト教批判として多起源論を論じたわけだが、聖書(キリスト教)批判ではない多起源論がやはりスコットランド啓蒙から出現した。スコットランド常識哲学の中心人物の一人であったヘンリー・ヒューム(与えられた貴族の称号からケイムズ卿とも呼ばれる。以下、デイヴィッド・ヒュームとの混同を避けるためケイムズ卿とする)の『人間史素描』(Home 1774)である。ケイムズ卿は法の自然史における業績が有名だが、多方面の分野で活躍したアンシクロペディストで、2巻本3部冊の『人間史素描』はケイムズ卿の

学問的関心が多岐にわたることを示した好例である。人間の歴史を野蛮から成熟に向かうプロセスとして、私の領域の考察、教育論、論理学、修辞学、美学、哲学、歴史学、論理学、道徳学、神学といった分野から考察し、第1巻序論の「人間と言語の多様性」(Home 1774: 1-43)では人間と言語の多様性について論じている。

ここでケイムズ卿が標的にしているのはビュフォンである。「人間には生まれながらにして異なる気候に適した人種 (races) が存在するようだ」として自らの多起源論的立場を表明しつつ、「共に子孫を残すことのできる動物は一つの種であるという法則から、全ての人間は一つの種族であると結論づけ、人間の間に見られる全ての多様性を気候や食物やその他の偶然の原因に帰着させる」(Home 1774: 6) ビュフォンの議論を論駁していく。ヨーロッパ人が何代にわたって植民地に居住してもその新しい気候に適応できず、アフリカから連れてこられたニグロがやはり数世代にわたってアメリカに居住してもその形質（皮膚の色）が変化せず、同じ気候下でも諸民族に性格や形質に差異が生じる一方、気候が違って同じ民族であれば性格や形質が同じであるのはなぜか。ケイムズ卿は種々の例を挙げながら、ビュフォンだけでなく人間の多様性を気候の違いから説明する古典古代の著名人たち——ウイトルウィウス、ウェゲティウス、タキトゥスなど——にはじまって同時代の「手ごわい敵」であるモンテスキューまでを批判していくのである (Home 1774: 26-31)。

注目すべきは、ケイムズ卿が多起源論の立場を採りながら、ヴォルテールやヒュームとは違って、すべての人間はアダムとイブの末裔であるという聖書の記述に沿う解釈をしていることである。神は天に届かんとする塔を協力して作ろうとする人間たちの不遜さに憤り、塔を破壊し、人間が話していた言葉を乱して（多言語化して）相互に理解できなくなさせ、世界に人間を散らばせたとする『創世記』11章のバベルの話を持ち出し、神がそれぞれの環境に適合的な人間を再創造したと解釈することで聖書と多起源論を調和させるのである。

聖書の記述に人間の多起源を読み取るのはケイムズ卿が初めてというわけではない。中世には、ルネサンス期にはパラケルスス、ジョルダノー・ブルーノといった学者が聖書の矛盾に気づいて、アダム以外にも人間の起源があるという考えを示唆していたが、16世紀まではこうした考えは散発的なものであり、伝統的な聖書解釈が圧倒的な力を持っていたことや人目に触れれば異端思想として厳しく弾圧されたため、活字化されてもごく一部に出回っただけで大きな影響力を持つことはなかった (Popkin 1976: 52-3; Livingstone 2008: 23-5)。

しかし17世紀になるとヨーロッパで広く議論される多起源論が出現した。イザーク・ラ・ペイレールの『プレアダマイト』(La Peyrère 1655)である。ラ・ペイレールはフランスのカルヴァン主義者で（ポルトガル系ユダヤ人の改宗者でいわゆるマラーノだとされる）、学者としての専門的訓練を受けてはいなかったもののマラン・メルセンヌ、ホップズ、ガッセンディ、ラ・モット・ル・ヴァイエ、グロティウスといった当時のフランスにあった知識人サークルと交流があり、独自に古典古代の文献や聖書の研究に取り組む在野の研究者で、

当時まだ未知の土地であったグリーンランドに調査旅行に赴く探検家でもあった。

ラ・ペイレールの聖書研究は、その諸所に神の啓示を見出すそれまでの聖書受容とは違って、パッチワーク的な時空構造になっている聖書に今日で言うところの本文批評を行い、史書として記述の整合性を検討し、描かれた事象をリニアに整理するものだった。こうした検討によって聖書は人間の手によって継ぎはぎされたものであることを指摘し、聖書が内包する齟齬や矛盾を明らかにした。しかしラ・ペイレールは聖書の信憑性に疑義を呈することはなく、むしろその権威をペイレールなりに守ろうとして提示したのがプレアダマイト説であった。その内容を大雑把にまとめれば、従来の聖書解釈では対応できず、ゆえにその信憑性を脅かすことになっていた先住アメリカ人の存在とエジプトや中国、インドなどの非ヨーロッパの歴史書に記述されている聖書よりも「古い歴史」を聖書の新解釈によって救うことだった。具体的には、聖書にはアダム以前に異邦人（プレアダマイト）の存在が記述されている——『創世記』第1章と第2章に異なる文脈で記されている神による人間の創造に対して、神はまず異邦人＝プレアダマイト（アダム以前の人間）を、次いでユダヤ人を創造した——と解釈することで、聖書より古い異教徒の歴史書と大航海時代以降の新しい情報を聖書に取り込もうとした（Grafton 1994: 204-13）。ラ・ペイレールは、聖書を世俗的な史書と聖史としてのユダヤ史に切り分け、アダム以前の野蛮な時代がユダヤ人の創造によって救済されたとし、メシアが現在に再び到来して、フランス王のもと、キリストの誕生以来迫害されてきたユダヤ人が最低限の改宗を行いつつ中心的役割を担ってすべての人間が再び救済されるという（改宗ユダヤ人ならではの）新たな聖書解釈を提示したのだった（Popkin 1976）。

ラ・ペイレールのプレアダマイト説はその斬新さからヨーロッパ中で評判になったものの、異端思想と見なされて厳しい反論と否定にさらされた。前世紀までのように処刑されることこそなかったが、ラ・ペイレールの繰り広げた数々の釈明は認められず、最終的にはプレアダマイト説の撤回を公式に表明し、カトリックに改宗させられることで終わった³²⁾。先述したようにラ・ペイレールのプレアダマイト説は聖書の権威を守るべく提唱されたのだが、逆説的にもその試みは聖書から神聖不可侵性と完全性を剝奪して世俗化する「解釈革命」の始まりを示すものであった（Grafton 1994: 205）。ラ・ペイレールのプレアダマイト説は弾圧されたこともあってその後忘却されるのだが、19世の米国で奴隷制擁護のイデオログとなったアメリカ人種学派が歴史的な文脈を捨象して蘇らせることになる。

啓蒙期におけるヨーロッパ中心主義的多起源論の極北とも言うべきは、クリストフ・マイナース『人類史の概説』（Meiners 1785）だろう。マイナースは今日ではほとんど知られていない学者であり（Guettel 2012: 49）、ドイツ民族の卓越性と他人種・他民族に対する劣等視のゆえに、ナチスの人種論の源流の一端として言及されるくらいだが（Mikkelsen 2013: 197）、1770年代から1800年代初頭には形而上学的な思索を否定し、人間の存在に関する経験的な探究を重視する「通俗哲学（Popularphilosophie）」を展開する一方、思弁的で難解な

カント哲学批判の急先鋒として当時影響力を持ったゲッティンゲン大学の教授だった（Baum 2006: 84）。マイナースの通俗哲学は今日の人類学的なアプローチに近いもので、『人類史の概説』も諸民族の特徴を人類という統一的な観点から民族誌的に記述すべく試みられた。実際、今日白人（白色人種、コケージアン）の由来であるコーカサスを人種分類に採用したのはマイナースで、太古に人類が誕生したときに「タルタル族あるいはコーカサス族（Tatarischen oder Kaukasischen Stamm）」と「モンゴル族（Mongolischen Stamm）」の2族に分岐し、さらなる分岐と混淆が起ることで現在の諸民族が生じたと論じた。晩年にはこの人種の2元説を撤回して人類には多くの起源種があると主張するようになるのだが（Carhart 2009: 61）、根源種からの主要種族の不可逆的な分岐というもとの人種分類の枠組みは、後述する（マイナースが批判した）カントの議論に依拠していると思われる。

マイナースの議論はしかし、種々の旅行記に依拠しながら恣意的かつ牽強附会の議論で混乱もしており³³⁾、当時においてもその人種分類は信憑性が疑われていた（Painter 2010: 101）。「コーカサス」の採用にしても、17世紀後半から18世紀初めに刊行されてヨーロッパで人気を博したジャン・シャルダンの旅行記『ペルシア紀行』³⁴⁾に基づいた、今日的な意味ではとても学術的とは言えない手続きによるものだった。シャルダンがジョージアの少数民族であるミングレル人の女奴隷の美しい顔立ち、身体や白い肌、ジョージア女性の顔と身体の美しさをほめそやしていたが（Chardin [1686] 1735=1993: 149, 237-8）、マイナースはそうしたシャルダンやリンネのもとで学んだドイツ人でロシアの側からコーカサス地域を調査したヨハン・G・ゲオルギーの旅行記（Georgi 1775, 1776）に依拠して「コーカサス諸民族、とくにその女性たちは地上で最も美しい」と述べ、これらの民族は「立派な体格、美しい顔立ちや目鼻立ち……」によって「モンゴル諸民族と区別される」と明言した（弓削 2011: 14）。

ちなみにビュフォンもシャルダンなどの旅行記に依拠して「他の国では、ペルシアの血は、ジョージアとコーカサスの血の混合によって、現在非常に美しくなっている。この2つの民族は、自然が最も美しい人を形成する世界である」とし、さらにはオランダ人でアフリカ、アジア、ロシアを探検したヤン・ヤンソン・ストライスの旅行記（Struys 1676）を援用して「コーカサス人女性もまた、非常に色白で美しい」と述べ、さらにフランス人の宝石商・旅行家ジャン＝パティスト・タヴェルニエの旅行記（Tavernier 1677）に言及して、コーカサス人女性の美しさを繰り返し称賛している（Buffon [1749] 2009: 471-3）。つまり啓蒙期の知識人においては、コーカサス人（女性）の肌の白さや美しさは17世紀の諸旅行記にもとづくものとはいえ、常識として定着していたことがわかる。

マイナースの人種分類も同様で、こうした既存の旅行記や風聞に基づいた恣意的な論述に終始した。「人種」それ自体に関しても、Kaukasischen Stammが別の箇所ではKaukasischen Nationenになり、Stamm, Race, Nation, Völkeなどが区別なく使われ³⁵⁾、その

概念が明確に定義されることもなかった。啓蒙期においては——実は現在でもそうなのだが——こうした起源を共有するとされる人間集団を表す用語の定義は曖昧で、先述したような用語群は区別なく使われたし、race という用語がフランス語から移入されたばかりの18世紀のドイツ語ではその綴りも安定していなかった³⁶⁾。とはいえマイナースのヨーロッパ中心主義と非ヨーロッパに対する蔑視という議論の基調は著書の冒頭から終始一貫していた。

現在の人類は、タタール族またはコーカサス族とモンゴル族という二つの主要民族からなる。後者は肉体的にも精神的にもはるかに弱いだけでなく、コーカサス族よりもはるかに邪悪で不徳である。最終的にコーカサス族は再度ケルトとスラブの二つの人種に分かれるが、前者は霊的力と美徳に最も富んでいる。…なぜ、地球の一部と特定の民族 *Völke* がほとんど常に支配者であり、他のすべては召使だったのか。なぜ、太古の昔から自由の女神はこのような狭い範囲にしか住まず、逆に、最も恐ろしい専制主義は、地球のほとんどの民族の中にその最も非人間的な王座を築いていたのだろうか。最後に、ヨーロッパ諸国が、たとえ野蛮と未開の状態にあったとしても、より高い美徳、啓蒙に対するより大きな受容性、その憲法、習慣、戦争のやり方、女性、奴隷、打ち負かした敵に対する行為によって、地球の他の地域の野蛮人や未開人と非常に異なっていたのはなぜであろうか。
(Meiners 1785: Vorrede 3-4)

マイナースは晩年になればなるほど、人間の平等という考えを徹底的に嫌い、批判して、その人種優越主義は先鋭化し、奴隷制やヨーロッパの植民地支配を擁護する論陣を張り、ヨーロッパではユダヤ人やスラブ人の、非ヨーロッパではアメリカ先住民やアフリカ人の劣等性を主張し、北方ヨーロッパ人の優越性を寿いだ (Michael 2021: 28-32)。興味深いのは、マイナースが影響を受けた哲学者がロックとヒュームというイギリス経験論の哲学者たちであり、先述した議論からわかるようにマイナースのドイツ優越主義はヒュームのアングロ＝サクソン主義を移入したものだだったことである。

8. 人種論の科学化：発生論と系統論

啓蒙期半ばにはそれまでの伝統的な民族誌的性格が強い記述に変わって、人種の差異を科学的に説明する人種論が登場した。発生論的なアプローチを試みたのがフランスの科学者ピエール＝ルイ・モロー・ド・モーペルテュイで、系統論的なアプローチを試みたのがドイツの哲学者イマヌエル・カントである。モーペルテュイは、『地上のヴィーナス』(Maupe-tuis [1745] 1980)³⁷⁾において、当時の科学界では生物(動物)の胚発生に関して激しい論争——生まれてくる子どもの形態・形質は卵などの内部に既に入れ子上に存在しているとい

う前成説（先在説）と精子と卵子による受精卵から発生していく過程でしだいに分化して形成されるという後成説（精原説・卵原説）との間で繰り広げられた——に介入して、前成説もそれまでの後世説も批判し、雌雄精液からの合成説を新たに唱えた³⁸⁾。注目すべきはその第2部で、第1部で論じた理論を展開して世界における人間の変異と人種の分布に関する説明を行ったことである。人間は生殖の際に雌雄精液の結合が失敗すると父母ではなく遠い祖先に似るような変異体が生じ、環境によっては変異体が何世代も維持されて新たな人種（race）になるとして世界の人種分布を説明した。もともと白い皮膚であった人間が変異によって有色の人種になるのだが、アルビノはその例証であるとモーベルテュイは考えたのである。啓蒙期、アフリカ人のアルビノの存在が報告され、見世物としてヨーロッパに連れてこられて実際に観察されると、その異形の理由が学界でも巷でも繰り返し言及され議論された。それまでの肌の色をマーカーとする人種の境界——白人（ヨーロッパ人）とアフリカ人（ニグロ）の境界——を侵犯する事態に直面したからである。先述したヴォルテールがアフリカ人のアルビノを1人種と見なし、人類の多起源説を採ったのもその反応のひとつと言ってよいだろう。

モーベルテュイは、温帯に最も美しい人々（皮膚の白い人々）が居住していたのが、生殖の際の雌雄精液の結合に失敗して異常な変異体（モーベルテュイは *Monstres* と呼んでいる）が生まれて、人々は恐怖からそうした変異体を追放し、やがて熱帯地域には黒人が、両極地帯には小人（Nains）や巨人（Géants）が生息するようになったとした。小人や巨人といった伝統的な異形の民族誌の影響が多分に残っており、温帯地域に住む皮膚の白い基本人種の両極への劣化的な拡散として人間の多様性を説明することは、構造的にはビュフォンと同様で、自らの住む地域を文明の中心に据えてそこから周縁を野蛮として論じていくアリストテレスの議論を踏襲するものとなっている。その意味ではモーベルテュイにとってもヨーロッパ人（白人）の優越性は自明なものであった。

モーベルテュイは発生論的関心から人種的差異の生成を考察したわけだが、カントは人種的差異を説明するために系統論を持ち込み、発生論的な起源へと遡及する議論を行った。カントは人種の多様性についていくどか考察を試みているが、最初は自身が開講する自然地理学講義の告知として発表された文章の一部であった「さまざまな人種について」（Kant 1775=2001）である。ビュフォンの現象的で直観的な人種分類をいわば理論化したもので、モーベルテュイとはまた異なる遺传的なアプローチとなっている。まずリンネ流の生物の形態を比較して類似を見出す恣意的な分類を批判し³⁹⁾、生物の内在的（系統的な）変遷を見出して分類する自然史的アプローチの重要性を主張して、人類の単一起源を前提に諸民族の関係を論じたビュフォンを称揚する。どの人間同士でも交配と生殖が可能なことから人類は共通の根幹（単一起源）を持ち、それゆえ人間には種という下位区分は存在せず、相互に遺传的な異形があるとすればそれは変種であり、血統の遺伝形質はその血筋と一致する場合は

相似形成で、しかし変種が退化すると根源的な根幹形成を生み出しえなくなるとする。ここでカントが興味深いのは、人類の下位区分（民族にとっては上位区分）に「種族（Rasse）」という人種区分を設けていることである⁴⁰。その種族の弁別基準は皮膚の色に関して雑種が生まれるかどうかで、たとえばニグロと白人の間には皮膚の色がその中間になる雑種が必ず生まれるので別種族であり、ブロンドとブルネットであればその間に純粋ブロンドも純粋ブルネットも生まれるので、それら2つは白人の異なった種族でなく、変形変種だとされる。その後は、ビュフォン同様、こうした変形変異が気候や食物、風土によってどう生じたのかが考察され、温帯地域に居住する人間が根幹人種に近く、ブルネットの白人だとされる。

続けてカントは、ビュフォンを踏襲するように諸民族を種族に振り分けていくのだが、その際にはビュフォンの議論では示されなかった基本となる種族を現存する諸民族から4つ抽出する。白人種族、ニグロ種族、フン種族（モンゴル種族またはカルムイク種族）、ヒンズー種族またはヒンドウスタン種族である。そしてそれらの種族の特徴と地理的な隔離の度合いから現存種族の祖型種族が4つ導出される。第1種族は多湿寒冷地の高ブロンド人種（北部ヨーロッパ）、第2種族は乾燥寒冷地の赤銅色人種（アメリカ）、第3種族は多湿高温地の黒人種（セネガンビア）、第4種族は乾燥高温地のオリブ黄色人種（インド）である。聖書由来の3大陸にアメリカ大陸を加えて4大陸とし、属地的に種族が振り分けられているのはリンネと同じで、ある意味伝統的なものだと言ってよい。各民族を説明する際に体液説的な用語が用いられ、身体的特徴と性質・性格の特徴が対応することが前提にされた議論も見られて、古典古代以来の伝統的な心身観の残滓が多分にあることがわかる。

一方で、各種族が特有の皮膚の色を持つ理由や皮膚の色によって種族を峻別する理由を環境に対する生理学的な適応として（体液やフロギストンを用いて説明しているために、今日からすると説得力はないものの）当時の最新の知見を動員して科学的な説明を試みており、こうしたアプローチはほかの論者には見られない。と同時に、カントはビュフォン流の退化による変異という考え方を採らない。カントにとって生殖による種の自己再生産は有機体が本来的に持つ合目的性に則るものである以上、種が外因によって他種に変化するとは考えないからである。後述するブルーメンバッハは有機体が発展するのはその根源に形成衝動（Bildungstrieb）⁴¹が存在することによるという思弁的な理論——ブルーメンバッハは極力思弁を避け、記述的な議論に徹していたのだが、形成衝動という思弁だけは例外的に展開した——を披露しているのだが、カントはこのブルーメンバッハの形成衝動論を高く評価した（Kant 1785=2001: 151）。ひとえに環境要因による人間の変化を認めないカントにとって、このブルーメンバッハの思弁は自らの主張を強力に支持するものに映ったに違いない。

先述したようにカントはその後にも人種論をいくどか執筆するのだが、その内実——皮膚の色をマーカーにして、一つの根幹種族（温帯地域の白人種族）がかつて存在し、その根幹人種に系統的に四大陸で変異が生じて遺伝的に固定されて四つの種族が生じたという伝統的な

地政学に沿った理論——は変わることがなく、『実用的見地における人間学』に至ると、ドイツの医師・化学者クリストフ・ギルタナーの人種論『自然史のためのカント主義的原理について』（Girtanner [1796] 2001）があるので自分が人種論を展開する必要はもはやないと宣言する（Kant 1798=2003: 310）。そのギルタナーの人種論は、生物一般に妥当する分類学タクソノミーの一環として構想されており、カントの種族の理論的枠組みを踏襲しつつ、黒色人種と白色人種の二極を設定し、環境による影響と交配によって種族に分化するとしたものだった。

ギルタナーは冒頭で自分の著作はブルーメンバッハの議論を普及するための試みだと述べているのだが、その人種分類はブルーメンバッハとは異なる5つの人種、白色人種（ヨーロッパ系とモンゴル系を含む）、ヒンドウスタン系、エチオピア系、アメリカ系、マラヤ系を設定し、当時知られていた膨大な数の世界の諸民族をその5人種に振り分けるものだった。カントが人種論はギルタナーで十分だと述べたのも、自分の議論をギルタナーが実証してくれたということなのだろう。しかしギルタナーの人種論は、同時代において影響力を持つことはなかった（Bernasconi 2001: v）。その人種論自体に新味がないということ以上に、18世紀末にはブッキッシュな博物学の存在意義がもはや失われていたことが大きいだろう。

カントの人種論は同時代の議論や批判に応答するかたちで更新された。「人間の歴史の臆測的始元」（Kant 1786=2000: 95-115）はドイツの哲学者ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー『人類の歴史哲学のための構想』（Herder 1784-91=1948-9）の批評／批判として書かれたし、「哲学における目的論的原理の使用について」（Kant 1788=2001: 117-57）が書かれたのは、クックの第2回航海に帯同して『世界周航記』（Forster 1777, 1778-80=2006-7）を執筆した博物学者のゲオルク・フォルスターから「人種概念の規定について」や「人間の歴史の臆測的始元」が批判されたことによる。

ここで注目したいのは、フォルスターによるカント批判「人種論を再考する」（Forster 1786=1983）の論拠である。フォルスターはカントが依拠している事実の間違いを指摘しつつ⁴²、根幹種族から4種族へ人間が分派したという仮説に疑義を呈する。カントが依拠している資料はその時点での限られた調査による限定的かつ暫定的なものでしかなく、新たな事実によって仮説は変わりうる。見出されている種族も仮説的な思弁の産物に過ぎない。人類を皮膚の色という形質にだけ基づいて弁別し、系統的（遺伝的）に固定化された種族（亜種）を想定して、その交配から人間の差異を説明するカントの発想をフォルスターは嫌い、人種には白色人種と黒色人種の2種類が考えられるとしつつ（この意味でフォルスターは多起源論者であった）、人間の多様性をあくまでも連続的な変容として理解する。興味深いのは、フォルスターはカントが人間に持ち込む種差を批判するために、「ニグロが明らかにその外面的ならびに内面的形態において、白人よりずっと、猿猴類との一致点を有している」（Forster 1786=1983: 163）と述べていることである。一見わかりづらい議論だが、異なる種であるニグロ（人間）とサルであっても連続した面があるのだから、カントが恣意的に特

徴の違いを取り出してヒトに種差を持ち込むのは乱暴な思弁であるということなのだろう。

こうしたフォルスターの認識の背景には全事物は階梯的な連続性を持つという「存在の連鎖」があらうし、ヘルダーに言及しているのも (Forster 1786=1983: 163), ヘルダーが『人類歴史哲学への理念』(Herder 1784=1948-9) で諸民族に認められる多様性を単一種(ヒト)における連続的かつ可逆的な変化にとらえ、人種といった不可逆的な遺伝的区分に消極的な姿勢を示していたことがあるだろう。とはいえフォルスターは人類に文明論的な序列を持ち込んでいた。サルに近いのが白人ではなくニグロであるのは、ニグロが(白人の)子ども段階の理性しかもたない未熟な存在だからである。フォルスターは植民地を実際に訪れて、ヨーロッパ人の黒人に対する暴虐や奴隷としての扱いを批判しているが、その解決は黒人がヨーロッパ人並みに理性を持つべく教化されることにほかならなかった (Forster 1786=1983: 178)。つまり^{エンライトゥメント}理性の光によって人間の蒙昧は払拭されるという啓蒙の理念は、文明のヨーロッパが行っている非道を批判する人間主義を体現する同時に、遅れた非ヨーロッパ人の^{ナイト}蒙昧も(ヨーロッパの)文明によって救済されるという植民地主義イデオロギーを合理化する二面性を持っていたのである。

注

- 1) たとえば啓蒙思想に人種主義の萌芽を見ている例として先に上げたマイルズとブラウンは、今日植民地主義的人種主義とされる移民問題(移民排除・差別)の起源を啓蒙思想に見出し (Miles and Brown 2003), モッセはナチスのユダヤ人絶滅政策に結果した反セム主義の起源を啓蒙思想に見出しているが (Mosse 1978), それぞれが他方の人種主義に言及していないわけではないものの、2つの人種主義の関係や異同については論じていない。というより他方の人種主義に関してはそもそも関心が払われていない印象を受ける。
- 2) ここで述べている系譜学はミシェル・フーコーのそれに負っている。フーコーは「系譜学は、同時に分散し、非連続的で、規則正しい言説の編成を研究する」とし、その分析の射程を説明している (Foucault 1975: 67-8=1984: 67-8)。考察対象である時代の言説編成を支える政治を剔抉することが本稿の系譜学の目的である。
- 3) 間テキスト性の概念に関しては、ジュリア・クリステヴァ (Kristeva 1970) によった。
- 4) たとえば啓蒙期の人種言説を人種主義の観点から編集した資料集として次のようなものがある。Eze, Emmanuel Chukwudi, 1997, *Race and the Enlightenment: A Reader*, Cambridge, Mass.: Blackwell, Bernasconi, Robert, 2001, ed., *Concept of Race in the Eighteenth Century Volume 1-8*, New York, London: Thoemmes Press. 前者はポストコロニアルの観点から啓蒙思想を批判的に取り上げたもので、言語や地域に限定されがちな啓蒙時代の思想史をフランス、ドイツ、英語圏にまたがってトランスナショナルに扱っており、批判的人種論の観点から啓蒙期の人種言説を扱った先駆的な研究の一つと言ってよい。後者は全8巻からなる浩瀚なもので、トランスナショナルに取り上げているだけでなく、原典を影印で収録しており、現時点で啓蒙期の人種言説を網羅的に考える上での基幹的な資料となっている。
- 5) 近年、従来であれば入手が困難を極めた、本稿の史料対象となっている啓蒙期の原典の多くが

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

インターネット上で公開されている。本稿では確認できるものはできるだけこうしたインターネット上で公開されている原典を参照するようにした。

- 6) たとえばラス・カサスはその身体の優美さゆえにインディオは崇高な靈魂を持つと賞賛した (Las Casas 1560=1995: 46-7)。
- 7) アリストテレスの著作はながらくヨーロッパにおいて聖典であったがゆえに、その『政治学』における人間には生まれながらに奴隷となる者とその主人となる者がいるという記述は奴隷制の根拠とされた。なおアリストテレスの時代には、戦争捕虜は戦争の勝者が自由に使役できる、比較的安価に売買可能な“動産”であった。
- 8) ここでのサラマンカ学派とは、松森にしたがって「ビトリアやその弟子筋の下で学び、大学や学部を問わず教職についた者、およびサラマンカ大学やサン・グレゴリオ修道院でこれらの学者と密接な関係を保った教育者」とする (松森 2009: 7)。
- 9) 自然法とは、自然に存在し、人間一般に妥当すると想定される法のことだが、当時においては文明化された人間のみがその主体になりえるものであった (松森 2009: 60)。
- 10) レケルミエント（催告）とは、インディアスの征服に当たって、神から権力を委託された教皇がスペイン国王に布教のためにインディアスを託したゆえに、インディオに対してスペイン国王の正当な支配権とキリスト教教義を受け入れるよう要求し、従わなかった場合は戦争によって教会と殿下の束縛と服従の下におき、その際に生じた被害や損害はインディオ側の責任であると告げるものである (松森 2009: 108-9)。今日からすると一方的な戦争の正当化だが、これ以後スペインではこの催告の法的正当性も議論された。ただし布教の正当性から敷衍されるスペインのインディアス支配は疑われることがなかった。
- 11) スペインは、当初インディアス統治に植民者（征服者）に土地とともに先住民を割当て、その貢納金と労働から利益を得させるレバルティミエント制を採っていたが、あまりにインディオが酷使されたため、インディオの保護と教化、地域の防衛を条件にスペイン国王が植民者にインディオの統治を委託するエンコミエンダ制を採った。委託を受ける植民者（エンコメンデロ）は代償として一定の土地とインディオに賦役、貢納を課す特権が与えられた。
- 12) ラス・カサスが植民地の労働力としてインディオに代わってアフリカ人奴隷を提案したことについてはアラバマ大学のラテンアメリカ史研究者であるローレンス・クレイトンの議論 (Clayton 135-150) を参照。クレイトンによれば、ラス・カサスが生まれ育ったセルヴィヤでは多くのアフリカ人奴隷が使役人として社会に溶け込んで生活しており、アフリカでの奴隷狩りやアンティル諸島、アメリカ大陸などの植民地でのアフリカ人奴隷労働の過酷な現実を想定できなかったことによるとしている。
- 13) ルネサンス期にメソポタミア諸民族やエジプト人に関する古代人の歴史書が「再生」され、プロテスタントたちによる聖書の本文研究が進んだことで、16世紀には聖書の年代に疑義がもたれるようになっていたが、1658年にイエズス会士マルティノ・マルティニ『中国古代史』が刊行され、中国の史書が聖書より古い歴史を記述していることがわかると、「聖書の時間」の疑わしさは決定的となった (岡崎 2016: 146-7)。
- 14) 啓蒙期における人種言説に絡んだジェンダーやセクシュアリティの諸問題についてはシービンガー (Schiebinger 1993=1996) を参照。
- 15) 啓蒙期における「黒人（黒色人種）」は概ねアフリカ人のことを指す。しかしながらその「黒人（黒色人種）」の外延は極めて曖昧で、恣意的で、多くの混乱が見られる。啓蒙期における

黒人（黒色人種）はフランス語で les Noires, 英語で the Black, ドイツ語で die Schwarzen である。そもそもはアフリカに住む人々の特徴（肌の色）から命名されたものだが、アフリカ以外の人々もその肌の色（表現型）から黒人とされることがある一方、肌の黒さだけでは黒人とされないこともあった。また、アフリカ人を黒人（黒色人種）に括らず、ムーア、ニグロ、カフィールなどの人種に分けた論者もいた（ビュフォンなど）。一般的にはムーアは北部アフリカの人々を、ニグロは中央アフリカの人々を、カフィールはコイコイ族などの南アフリカの人々を指し、その文明度に差を見出して人種的な優劣が論じられた（コイコイ族は最底辺の人種とされた）。一方で、ムーア人がニグロやアフリカ人一般と同義で使われたりもした（後述するゼメリングなど）。啓蒙期の人種分類は論者が収集した旅行記などに依拠したことや論者自身の先入観がそのまま反映されていることもあってそこに統一性を認めることは難しい。ムーア、ニグロ、カフィールにしても人種なのか民族なのかは論者によって異なり、使い分けられている場合もその基準は判然としない場合が多い。とりわけカフィールはさわめて曖昧で、把握しにくい。カフィールという用語の使用に関する「歴史的混乱」に関しては、米国のアフリカ史家ジョーキン・S・アートの議論（Ardnt 2018）を参照のこと。

- 16) カール・リンネ（スウェーデン語表記は Carl Linné）は著作を当時の国際学術語であったラテン語で執筆しており、そのラテン語名は Carolus Linnaeus となる。しかし伝統的に記載時のラテン語名は尊格が用いられるため語尾変化して Caroli Linnaei となる。本稿の文献表記では一貫性を持たせるため、スウェーデン語名を用いた。なお 1762 年に貴族の称号を与えられて以降、Carl von Linné となった。
- 17) 岡崎（2005: 7-8）は、リンネは保守的な信者で、その篤信から当時のヨーロッパの文明社会を人間の歴史的墮落と批判的に見なしており、そこから人間をサルと同等の存在に降格する発想が生まれたのだとしている。
- 18) 当時、スウェーデンでは開拓地である北方領域は「スカンジナビアの西インド」と呼ばれた（Koerner 1999: 7）。サーミはいわばヨーロッパ内の「インディオ」と見なされたわけである。
- 19) 調査成果は『ラップランドの植物相』（Linné 1737）として刊行された。リンネはこの調査書でラップランドの農業開発について提案していたりする。
- 20) 岡崎（2005: 11）が訳出した『自然の体系』（第 10 版）のホモ・サピエンスの分類表によれば、リンネは「野生人」として「四つ足、口がきけず、毛深い」と記したうえで「リトアニアの熊少年、1661 年、ヘッセンのオオカミ少年、1344 年、ヒベルニアのヒツジ少年、ハノーバーの少年、ピレネーの子供たち、1719 年、レオディケアのヨハネス」と例を挙げているが、これらはルソーが『人間不平等起源論』で挙げた例でもある。
- 21) リンネが「奇形人」として挙げているのは「アルプスの小人、パタゴニアの巨人、単睾丸人（ホッテントット）、ヨーロッパの灯心草人（腰細人）、中国の大頭人、カナダの平頭人」（岡崎 2005）で、古典古代以来の「化外の民」の伝承の影響が多々認められる。
- 22) リンネは当時には人間とサルとの境界に位置すると考えられていたオラウータンと現在では内実がよくわからないカクルラッコという存在を「穴居人」の例として挙げている。注目すべきは、この亜属をアフリカ人、プレアダマイト、南極地域の住民だという「毛深い有尾人」との関係において論じていることである（岡崎 2005: 補遺 2）。ブルーメンバッハはこのリンネの「穴居人」は、アルピノの情報に尾ひれがついて形成されたものだと断じて、その存在を否定したという（岡崎 2005: 37）。

- 23) こうした点に関わって、岡崎（2005: 8）は「リンネは個人的特質から見れば啓蒙主義者ではなかった。しかし他方、その果たした役割から見れば、啓蒙主義者であったとすることができよう。リンネ以後、ヨーロッパでは人間を動物界の一員として扱うことはもはや動かない思考的枠組みとなったからである」と述べている。
- 24) 一方で、ビュフォンは当時において人間と動物とを同じ生物として同列に扱うことは宗教的にタブー視されていたため、批判を避けるために人間と動物を同じ範疇に入れながらも、その差異を際立たせる書き方をしている（西川 1986: 125）。
- 25) ビュフォンの「人間誌」における諸民族の序列的な形容に関しては西川（1985: 133-4）の議論に多くを負った。なお肌の色 *teint* には、黄褐色 *jaune-brun/jaunâtrebrun*、浅黒さ *basané*、オリブ色 *olivâtre*、灰白色 *endre*、暗色 *obscur*、赤色 *rouge*、鶯色 *brun mêlé de rouge*、銅色 *cuivre*、黒 *noir*、灰色 *gris*、白 *blanc* が使われている。
- 26) 啓蒙期の人種論を単一起源論あるいは多起源論と対立的に弁別するのは遡及的な分節化であることに注意する必要がある。人類の単一起源論や多起源論が対立するかたちで学説化されたのは、19世紀前半にアメリカ人種学派と呼ばれる米国の人類学者たちが多起源論を強力に提唱したことによる（Gould 1996: 62-104）。つまり啓蒙期にはいわゆる単一起源論あるいは多起源論というような学説が明示的に存在していたわけではない。
- 27) ヒュームの“Of National Characters”は基本的に政体を単位に論じているので「国民性について」と和訳されることが多い。ただし古代の都市国家やガリア、当時のフランドル、ドイツ、ニグロが同列に扱われていることから、その政体は現在のいわゆる国民国家の単位ではないことを示すために本稿ではこう訳した。
- 28) ヒュームに関する人種主義の問題については、西村（2021）の整理に多くを負った。
- 29) 引用は西村（2021: 64）の訳を参照したが、原文の *negro* は「ニグロ」に、*between these breeds of men* は「これらの人間の種族の間では」に変更した。なおヒュームはこの注が批判されたために後に修正を加えたが、その経緯に関しては西村（2021）が詳しい。
- 30) 同時代において、ヴォルテールはこの後に論じるカント「さまざまな人種」で同様に批判されている。「ヴォルテールとともに、神は寒冷な地域のコケを食い尽くさせるためにラップランドにトナカイを創造し、この神はまたその同じ場所にこのトナカイを食べさせるためにラップ人も創造した、と述べることは、詩人としては悪い思いつきではないが、哲学者としてはひどい間に合わせである。哲学者は、自然原理がどうやらじかに宿命と結合していると見る場合以外は、原因の連鎖から離れてはいけないのである」（Kant 1775=2001: 410-1）。
- 31) このヴォルテールの主張はポリャコフの指摘によった（Poliakov 1968=2005: 106=127）。
- 32) ベルニエが「種あるいは人種による地球の新たな分割」を匿名で執筆したのは、友人のラ・ペイレールがプレアダマイト説によって神学的に厳しく批判されたからだった（Smith 2003: 52-3）。
- 33) 米国の博物館学者ジョン・S・マイケルは、マイナスが『人類史の概説』で、ゲオルギーのロシア旅行記をあちこちで引用しながら、「タタール人は自分たちの祖先はモンゴル人と一緒であると述べている」というゲオルギーの報告を無視して「コーカサス系」は「タタール系」とも呼ばれると食い違った内容を書いていることを指摘し、こうした混乱や確証バイアス（自分の利用したい箇所だけを典拠とすること）が『人類史の概説』では随所で見られることを指摘している（Michael 2021: 18-9）。なお、マイケルはこの論文でマイナスのバイオグラフィーに沿いつつその研究の全体像を論じており、本論におけるマイナスの議論に関しては本論

文に多くを負った。

- 34) 『ペルシア紀行』は、1671年にパリ、1686年にロンドン、1711年にアムステルダム（3巻本）で出され、1735年に「完全版」全4冊がアムステルダムで出版された。
- 35) マイナスは引用箇所のみるようにコーカサスには *stamm* を用い、そこから派生したとするケルトとスラブには *race* を用いている（Meiners 1785: Vorrede **3-4）。
- 36) 望月俊孝によれば「ドイツ語の *Rasse* はフランス語の *race* からの借用語で、当初は *Race* と綴られ、カントもそのように表記した」（「人種の概念の規定」『カント全集3』（岩波書店、2001年）の訳注（1）を参照）。
- 37) *Vénus physique* というタイトルの和訳は複数あるが、ここでは新妻昭夫の訳によった（Gould [1986] 1996=1989: 179）。
- 38) モーベルテュイは、1744年に南米の黒人奴隷のアルビノの子どもがパリで展示されて大きな話題となったのを機に、前成説批判（前成説ではアルビノを説明できない）として『白いニグロについての自然学的論考（*Dissertation physique a l'occasion du nègre blanc*）』を匿名で刊行し、加筆修正したものを『地上のヴィーナス』として匿名で1745年に刊行して、1756年に著作集の一部として記名で最終版を刊行した（松永2019: 212-3）。
- 39) 実はビュフォンも形態的な類似に基づく分類を、その基準が人間の側にある恣意的なものだと批判していた（西川1987: 79-80）。
- 40) 注36参照。
- 41) 形成衝動に関しては、大田（2011）を参照。
- 42) フォルスターは、カントが白人としている太平洋諸島民たちは、カータレット、プーガンヴィル、ダンピア、クックらの旅行記では黒色から暗褐色の多様な皮膚の色であることが記され、カータレットの旅行記ではフレヴィル・アイランドの人々の肌の色は黄色ではなく銅色であるとして、カントの間違いを指摘している（Foster 1786=1983: 155-8）。

文 献

- Aristotelēs, n.d., *Politica*, (神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久訳, 2018, 『アリストテレス全集17巻 政治学・家政学』岩波書店).
- Arndt, Jochen S., 2018, "What's in a Word? Historicising the Term 'Caffre' in European Discourses about Southern Africa between 1500 and 1800," *Journal of Southern African Studies*, 44 (1): 59-75.
- Balibar, Etienne et Immanuel Wallerstein, 1988, *Race, nation, classe: les identités ambiguës*, Paris: La Découverte.
- Banton, Michel, 1970, "Concept of racism", Sami Zubaida, ed., *Race and racialism*, London: Tavistock Publication
- , 2016, "Racism," John Stone, Rutledge M. Dennis, Polly Rizova, Anthony D. Smith, Xiaoshuo Hou eds., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Nationalism*, London: Wiley Blackwell, 1717-8.
- Baum, Bruce, 2006, *The Rise and Fall of the Caucasian Race: A Political History of Racial Identity*, New York, London: New York University Press.

- Bernasconi, Robert, 2001, ed., *Concept of Race in the Eighteenth Century Volume 7: Girtanner*, New York, London: Thoemmes Press.
- Bernier, François, 1684, “Nouvelle Division de la Terre par les différentes Espèces ou races d’homme qui l’habitent, envoyé par un fameux Voyageur à M. l’abbé de la *** à peu près en termes,” *Le Journal des Savants*, Du Lundi 24 Avril. (Retrieved Jun 13, 2023, <https://books.google.co.jp/books?id=QykmjtRTBB8C>, Google Books.)
- Brotton, Jerry, 2013, *A History of the World in 12 Maps*, New York: Viking.
- Buffon, Georges-Louis Leclerc, Comte de, [1749] 2007, *Histoire Naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi, tome 1*, Paris: Honoré Champion Éditeur.
- , [1749] 2008, *Histoire Naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi, tome 2*, Paris: Honoré Champion Éditeur.
- , [1749] 2009, *Histoire Naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi, tome 3*, Paris: Honoré Champion Éditeur.
- , [1766] 2020, *Histoire Naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi, tome 14*, Paris: Honoré Champion Éditeur.
- Carhart, Michael C., 2009, “Polynesia and polygenism the scientific use of travel literature in the early 19th century,” *History of The Human Sciences*, 22 (2): 58–86.
- Chardin, Jean, [1686] 1735, *Journal du voyage du Chevalier Chardin en Perse*, London: Chez Moses Pitt. (Retrieved September 5, 2022 <https://books.google.co.jp/books?id=7YQCPSKqJ6gC>, Google Books.) (佐々木康之・佐々木澄子訳, 1993, 『ペルシア紀行』岩波書店.)
- Clayton, Lawrence A., 2011, *Bartolome de las Casas and the Conquest of the Americas*, Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Eze, Emmanuel Chukwudi, 1997, *Race and the Enlightenment: A Reader*, Cambridge: Blackwell.
- Forster, George, 1777, 1778–80, *Reise um die Welt*. (服部典之訳, 2006, 2007, 『世界周航記 上・下』岩波書店.)
- Forster, George, 1786, “Noch etwas iiber die Menschenrallen”. (Retrieved July 5, 2023, <http://www.zeno.org/nid/20004782356>, Zeno.org). (岡本伸一訳, 1983, 「人種論を再考する」フォルスター研究会編訳『ゲオルク・フォルスター作品集——世界旅行からフランス革命へ』三修社, 151–83.)
- Foucault, Michel, 1971, *L’ordre du discours*, Paris: Editions Gallimard. (中村雄二郎訳, 1995, 『言語表現の秩序』河出書房新社.)
- Fredrickson, George M., 2002, *Racism: A Short History*, Princeton: Princeton University Press.
- Georgi, Johann Gottlieb, 1776, *Beschreibung aller Nationen des Russischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidung und übrigen Merckwürdigkeiten*. (Retrieved July 20, 2023, https://books.google.com/books/download/Beschreibung_aller_Nationen_des_russisch.pdf?id=5XkQAAAIAAJ&output=pdf, Google Books.)
- Georgi, Johann Gottlieb, 1775, *Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich in den Jahren 1772, 1773 und 1774*. n.p. (Retrieved July 20, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Bemerkungen_einer_Reise_im_Russischen_Re/uy8VAAAQAAJ?hl=ja&gbpv=1, Google Books)
- Gilman, Stuart C., 1985, “Political theory and degeneration: From Left to Right, from Up to

- Down,” Edward Chamberlin and Sander L. Gilman eds., *Degeneration: The Dark Side of Progress*, New York: Columbia University Press.
- Gould, Stephen Jay. [1981] 1996, *The Flamingo's Smile: Reflections in Natural History*, New York, London: Norton. (新妻昭夫訳, 1989, 『フラミンゴの微笑み』早川書房.)
- Girtanner, Christoph, 1796, *Über das Kantische Prinzip für die Naturgeschichte: ein Versuch diese Wissenschaft philosophisch zu behandeln*, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht. (Retrieved July 23, 2023, https://books.google.com/books/download/Ueber_das_Kantische_Prinzip_?C3%BCr_die_Nat.pdf?id=j6tgAAAAcAAJ&output=pdf, Google Books.)
- Grafton, Anthony, 1991, *Defenders of the Text: The Traditions of Scholarship in an Age of Science, 1450-1800*, Cambridge: Harvard University Press.
- Guettel, Jens-Uwe. 2012, *German Expansionism, Imperial Liberalism and the United States, 1776-1945*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanke, Lewis, [1959] 1970, *Aristotle and the American Indians: A Study in Race Prejudice in the Modern World*, Bloomington, London: Indiana University Press. (佐々木昭夫訳, 1974, 『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波書店.)
- Hannaford, Ivan, 1996, *Race: the History of an Idea in the West*, Washington D.C.: Woodrow Wilson Centre Press.
- Herder, Johann Gottfried, 1784-91, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. (鼓常良訳, 1948-9, 『人間史論 1-4』白水社.)
- Home, Henry, Lord Kames, 1774, *Sketches of the History of Man Volume 1, 2*, Edinburgh: William Creech. (Retrieved, Jun 30, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Sketches_of_the_History_of_Man/Ki0MAAAIAAJ?hl=en&gbpv=1, Google Books.)
- Hudson, Nicholas, 1996, “From Nation to ‘Race’: The Origin of Racial Classification in Eighteenth-Century Thought,” *Eighteenth-Century Studies*, 29 (3): 247-64.
- Hume, David, [1754] 1758, “Of national character,” *Essays and Treatises on Several Subjects, A New Edition*, London: Andrew Millar, 119-29. (Retrieved, Jun 30, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Essays_and_Treatises_on_several_subjects/QLRcAAAAcAAJ?hl=en&gbpv=1, Google Books.)
- Kant, Immanuel, 1775, “Von den verschiedenen Racen der Menschen.” (福田喜一郎訳, 2001, 「さまざまな人種」『カント全集 3』岩波書店, 394-415.)
- , 1785, “Bestimmung des Begriffseiner Menschenrasse.” (望月俊孝訳, 2000, 「人種の概念の規定」『カント全集 14』岩波書店, 69-92.)
- , 1786, “Muthmaßlicher Anfang der Menschengeschichte.” (望月俊孝訳, 2000, 「人間の歴史の臆測的始元」『カント全集 14』岩波書店, 93-115.)
- 1788, “Über den Gebrauch teleologischer Prinzipien in der Philosophie.” (望月俊孝訳, 2001, 「哲学における目的論的原理の使用について」『カント全集 3』岩波書店, 117-7.)
- 片岡大右, 2012, 『隠遁者, 野蛮人, 蛮人——半文明的継承の系譜と近代』知泉書院.
- Koerner, Lisbet, 1999, *Linnaeus: Nature and Nation*, Cambridge: Harvard University Press.
- Kristeva, Julia, 1970, *Le Texte de Roman*, The Hague: Mouton.
- Las Casas, Bartolomé de, 1536, *Apologética historia sumaria*. (染田秀藤訳, 1995, 『インディオは

- 人間か』岩波書店).
- Lavejoy, Arthur Oncken, [1936] 1960, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, New York: Harper & Brothers. (内藤健二訳, 2013, 『存在の大いなる連鎖』筑摩書房.)
- 李孝徳, 2019, 「人種主義を日本において再考すること——差異, 他者性, 排除の現在」『クアドラント: 四球儀』東京外国語大学・海外事情研究所, (20): 87-107.
- Linné, Carl (Linnaeus, Carolus), 1735, *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines, genera, & species*, Lugduni Batavorum: Apud Theodore Haak: Ex Typographia Joannis Wilhelmi de Groot. (Retrieved July 26, 2023, <https://www.biodiversitylibrary.org/item/15373>, Biodiversity Heritage Library.)
- , 1737, *Flora Lapponica*, Amsterdam: Salomonem Schouten. (Retrieved July 26, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/Flora_Lapponica/aEo-AAAACAAJ?hl=en&gbpv=1&dq=Flora+Lapponica, Google Books.)
- , 1758, *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines, genera, & species*, 10th ed., Lugduni Batavorum: Apud Theodore Haak: Ex Typographia Joannis Wilhelmi de Groot. (Retrieved July 26, 2023, https://books.google.com/books/download/Systema_naturae_per_regna_tria_naturae_s.pdf?id=E20ZAAAAYAAJ&output=pdf, Google Books.)
- Livingstone, David N., 2008, *Adam's Ancestors: Race, Religion, and the Politics of Human Origins*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Long, Edward, 1774, *The History of Jamaica or General Survey of the Antient and Modern State of That Island: With Reflections on Its Situation, Settlements, Inhabitants, Climate, Products, Commerce, Laws, and Government vol.2*, London: Lowndes. (Retrieved, Jun 30, 2023, https://www.google.co.jp/books/edition/The_History_of_Jamaica_Or_General_Survey/xr0NAAAQAAJ?hl=ja&gbpv=1&dq=the+history+of+jamaica+vol.2, Google Books.)
- 松森奈津子, 2009, 『野蛮から秩序へ——インディアス問題とサラマンカ学派』, 名古屋大学出版会.
- 松永敏男, 2019, 「モーペルテュイとビュフォンの発生論と遺伝論」『人間文化研究』桃山学院大学総合研究所, (10): 209-24.
- Maupertuis, Pierre-Louis Moreau de, [1745] 1980, "Vénus physique," Réimprimé dans Patrick Tort ed., 1980, *Vénus physique; suivi de la lettre sur le progrès des sciences*, Paris: Aubier-Montaigne, 75-146.
- Meiners, Christoph, 1785, *Grundriss der Geschichte der Menschheit*, Lemgo: Der Meyerschen Buchhandlung. (Retrieved July 17, 2023, <https://archive.org/details/grundrissdergesc00mein/page/n1/mode/2up>, Internet Archive.)
- Michael, John S., "The Race Supremacist Anthropology of Christoph Meiners, its Origins and Reception." (Retrieved Jun 17, 2023, <https://www.academia.edu/49757945/>, Academia.edu.)
- Mikkelsen, Jon M., 2013, *Kant and the Concept of Race Late Eighteenth-Century Writings*, Albany: State University of New York Press.
- Miles, Robert and Malcom Brown, 2003, *Racism*, 2nd ed., London, New York: Routledge.
- Montesquieu, Charles-Louis de, 1748, *De l'esprit des lois*. (井上堯裕訳, 2016, 『法の精神』中央公論社.)

- Mosse, George L., [1978] 2020, *Toward the Final Solution A History of European Racism*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- 西川裕子, 1985, 「ビュフォンの「人間誌」(『自然誌』より) その1」『国際関係学部紀要』中部大学, (1): 125-36.
- 西内亮平, 2021, 「ヒュームと人種主義」『人間存在論』京都大学大学院人間環境学研究所『人間存在論』刊行会, (21): 61-74.
- O’Gorman, Edmundo, 1961, *The invention of America*, Bloomington: Indiana University Press. (青木芳夫訳, 1999, 『アメリカは発明された——イメージとしての1492年』日本経済評論社.)
- 岡崎勝世, 2005, 「リンネの人間論: ホモ・サピエンスと穴居人 (ホモ・トログロデュッテス)」『埼玉大学紀要教養学部』41 (2): 1-63.
- , 2016, 「第6章キリスト教的世界像」秋田茂ほか編『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房, 132-53.
- 小内透・野崎剛毅, 2018, 「第1章 北欧サーミの概況と歴史」小内透編, 2018, 『北欧サーミの復権と現状——ノルウェー・スウェーデン・フィンランドを対象にして』東信堂, 25-46.
- 大田浩司, 2011, 「18世紀ドイツにおける「形成衝動」の概念について」『Aspekt: 立教大学ドイツ文学科論集』(45): 3-26.
- Painter, Irvin, 2010, *The History of White People*, New York, London: W. W. Norton & Company.
- Plinius Secundus, Gaius, 77, *Naturalis historia*. (中野定雄・中野里美・中野美代訳, 2012-3, 『博物誌 1-37巻』雄山閣.)
- Poliakov, Léon, 1968, *De Voltaire à Wagner: Histoire de l’antisémitisme tome 3*. (菅野賢治訳, 2005, 『反ユダヤ主義の歴史 第III巻 ヴォルテールからヴァーグナーまで』筑摩書房.)
- Popkin, H. Richard, 1974, “The Philosophical Bases of Modern Racism”, Craig Walton and John P. Anton, eds., *Philosophy and the Civilizing Arts: Essays Presented to Herbert W. Schneider*. Reprinted in: Richard A. Watson and James E. Force eds., 1980, *The High Road to Pyrrhonism*, San Diego: Austin Hill Press Inc., 79-102.
- , 1976, “The Pre-Adamite theory in the Renaissance,” Edward P. Mahoney ed., *Philosophy and Humanism: Renaissance Essays in Honor of Paul Oskar Kristeller*, Leiden: Brill Archive, 50-69.
- Sepúlveda, Juan Ginés de, 1550, *Democrates, sive de justis belli causis*. (染田秀藤訳, 1995, 『第二のデモクラテス』岩波書店.)
- Smedley, Audrey and Brian Smedley, 2012, *Race in North America: Origin and Evolution of a Worldview*, Boulder: Westview Press.
- Smedley, Audrey, 2005, 山下淑美訳「北米における人種イデオロギー」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』人文書院.
- Smith, David, 2003, “Orientalism and Hinduism,” Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism*, Oxford: Blackwell Publishing Ltd.
- Schiebinger, Londa, [1993] 2013, *Natures Body: Gender in the Making of Modern Science*, 5th ed., New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press. (小川眞里子・財部香枝訳, 1996, 『女性を弄ぶ博物学——リンネはなぜ乳房にこだわったのか?』工作舎.)
- Struys, Jan Janszoon, 1676, *Drie aanmerkelijke en seer rampspoedige Reysen, Door Italien, Griek-*

啓蒙期ヨーロッパにおける他者創出の政治（上）

- enlandt, Lijflandt, Moscovien, Tartarijen, Meden, Persien, Oost-Indien, Japan, en verscheyden andere Gewesten.* (Retrieved July 2, 2023, <https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10469414?>, Münchener Digitalisierungszentrum, Digitale Bibliothek.)
- Stuurman, Siep, 2000, “François Bernier and the Invention of Racial Classification,” *History Workshop Journal*, (50): 1-21.
- Sweet, James H., 1997, “The Iberian Roots of American Racist Thought,” *The William and Mary Quarterly*, 54 (1): 143-66.
- Tavernier, Jean-Baptiste, 1677, *Les six voyages de Jean Baptiste Tavernier, ecuyer baron d'Aubonne, en Turquie, en Perse, et aux Indes, pendant l'espace de quarante ans, & par toutes les routes que l'on peut tenir: accompagnez d'observations particulieres sur la qualité, la religion, le gouvernement, les coütumes & le commerce de chaque país, avec les figures, le poids, & la valeur des monnoyes qui y ont cours, vol 1-7.* Paris: chez Gervais Clouzier. (Retrieved July 2, 2023, https://books.google.com/books/download/Les_six_voyages_de_Jean_Baptiste_Taverni.pdf?id=1mKWfADt5N4C&output=pdf, https://books.google.com/books/download/Les_six_voyages_de_Jean_Baptiste_Taverni.pdf?id=GpFhcxKt6KcC&output=pdf, Google Books.)
- 寺田和夫, 1967, 『人種とは何か』岩波書店.
- Vartij, Devin, 2020, “Revisiting Enlightenment racial classification: time and the question of human diversity,” *Intellectual History Review*, 31 (4): 603-25, (Retrieved May 9, 2023, <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/17496977.2020.1794161>, Taylor & Francis Online.)
- Voltaire, 1756, *Essai sur les moeurs et l'esprit de nations.* (安斎和雄訳, 1989, 『歴史哲学——「諸国民の風俗と精神について」序論』法政大学出版局).
- 弓削尚子, 2011, 「『コーカソイド』概念の誕生——ドイツ啓蒙期におけるブルーメンバッハの「人種」とジェンダー」『お茶の水史学』(55): 1-32.

* 本稿は、2022年度東京経済大学個人研究助成費（研究番号 22-29）に基づく研究成果の一部である。